

西弘小路遺跡

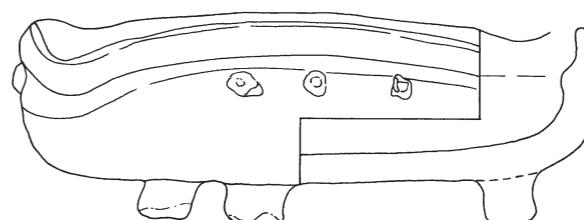
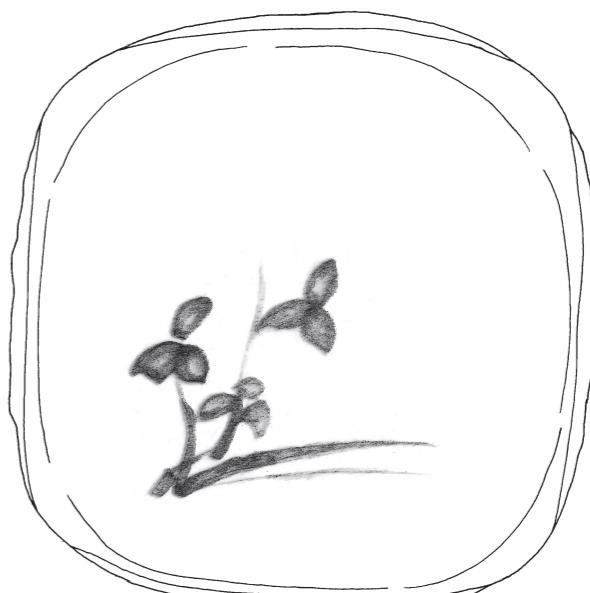
# 西弘小路遺跡

— 総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

高知市文化財調査報告書  
第34集

一一〇一〇・三

高知市教育委員会



2010. 3

高知市教育委員会

# 西 弘 小 路 遺 跡

— 総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2010. 3

高知市教育委員会

卷頭図版1



調査区風景



SX4遺物出土状況

卷頭図版2



志野焼向付（378）



志野焼向付（381）



志野焼向付（1199）



志野焼香合（388）



織部焼向付（386）

卷頭図版3



尾戸焼碗（836）



尾戸焼碗（1323）



尾戸焼碗（508）



尾戸焼水指（1004）



尾戸焼（1905）



尾戸白土器小皿（626）



能茶山焼碗（335）



能茶山焼碗（1336）

卷頭図版4



絵唐津壺 (1255)



絵唐津鉢 (152)



肥前産象嵌文鉢 (1254)



肥前産二彩手大皿 (1315)



初期伊万里碗 (1308)



肥前産変形皿 (723)



鍋島焼皿 (199)



景德鎮窯青花 (1277)

卷頭図版5



ミニチュア・土人形 (1537・1429・692・1834・698・1881・1173・1174・333)



泥面 (767・1911・1683)



鳩笛 (208)



土人形 (695)



墓石 (1303)

卷頭図版6



信樂焼茶壺 (1007)



水滴 (608)



簪 (710)



煙管 (293)



お玉 (705)



匙 (914)



子ども用下駄 (1629)



桐文瓦 (191)

## 序

西弘小路遺跡は、高知城天守を望む大高坂山西麓にあり、かつて城の西大門に通じた南北の広小路沿いに延びる、上中級武士の居住地にあたります。近くには江ノ口川の大堤防があり、郭中の西端部に位置します。元禄11年（1698）の大火後、城の内堀沿いは杉林となり、侍屋敷は広小路の西寄りに構えられ、西弘小路の町名は近年まで人々から親しまれてきました。

明治以降は主に医療機関が設けられ、平成17年初めまでは市民病院として市民の健康を守る役割を果たしてきました。

この度、病院の統合移転を経て、新たに保健・医療・防災の拠点施設となる「総合あんしんセンター」が建設される運びとなり、埋蔵文化財の緊急調査が実施されました。その結果、17世紀から19世紀にかけての侍屋敷に伴う多くの遺構や生活の一端を窺うことのできる様々な遺物を得ることができ、貴重な成果とすることことができました。

この報告書が、高知市の近世史を理解するうえで何らかの役割を果たし、また地域文化の解明への一助ともなれば幸いです。最後になりましたが、調査にご協力いただいた関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成22年3月

高知市教育委員会

## 例　言

1. 本書は、高知市教育委員会が平成19年度に実施した総合あんしんセンター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査対象地は、高知市丸の内一丁目7番45号他に所在する。
3. 調査期間と調査面積は次の通りである。資料整理、報告書作成は平成20年度から21年度にかけて行なった。

　試掘調査 平成19年9月18日～9月28日 調査面積381.4m<sup>2</sup>

　本調査 平成19年10月1日～12月26日 調査面積2,548m<sup>2</sup>

4. 調査体制は以下の通りである。

　調査主体 高知市教育委員会

　調査事務 高知市総合あんしんセンター建設課主査 岸田正法

　調査担当 高知市教育委員会生涯学習課指導主事 梶原瑞司、浜田恵子

5. 本書の執筆と編集は浜田が行い、遺物写真は梶原が撮影した。
6. 調査にあたっては、高知県教育委員会文化財課をはじめとする関係諸機関の方々の協力を得た。
7. 発掘調査にあたっては松田直則、池澤俊幸をはじめとする諸氏から助力を得た。また、絵図・文献調査に関して吉松靖峯、筒井秀一、陶磁器の資料調査について大橋康二、赤松和佳、石岡ひとみ、日下正剛、佐藤公保、鈴木裕子、西田宏子、能芝勉、乗岡実、東中川忠美、古銭について泉幸代、はじめ諸氏のご教示を賜った。(敬称略)
8. 発掘作業、整理作業においては下記の方々の協力を得た。

　[測量補助] 大野佳代子 田上浩 松本安紀彦

　[発掘作業] 上田善右 大崎数恵 大野佳代子 岡崎速男 横尾倫生 横尾洋子 澤村清  
　武内順一 武内昌子 濱田俊夫 弘田誠一 三谷哲彦 山下勝正 山本栄子

　[整理作業] 大野佳代子 横尾洋子 島村加奈 恒石陽子 松岡美佐 松木富子 森木愛子  
　渡邊可奈子

9. 掲載している平面図の方位は国土座標を基準としている。巻末の報告書抄録における経緯度については世界測地系の数値を使用している。
10. 遺構の略号は、土坑:SK、溝状遺構:SD、柱穴及び小型の穴:P、性格不明遺構:SX、とした。
11. 出土遺物は通し番号とし、挿図、写真図版とも同一番号を使用した。遺物は高知市教育委員会が保管している。注記の略号は「07-NK」である。

# 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境	2
1. 地理的環境	2
2. 歴史的環境	2
第Ⅲ章 調査の方法	9
第Ⅳ章 調査の成果	
第1節 基本層序	11
第2節 遺構と遺物	19
(1) 土坑	19
(2) 溝状遺構	226
(3) ピット列	229
(4) ピット	234
(5) 石列	238
(6) 性格不明遺構・焼土溜まり・瓦溜まり	238
(7) 包含層出土の遺物	253
第Ⅴ章 考察	
第1節 史料にみる西弘小路遺跡の性格と変遷	341
第2節 西弘小路遺跡検出遺構の性格と変遷	355
第3節 西弘小路遺跡出土遺物の様相	361
第4節 西弘小路遺跡出土の尾戸焼について	372

# 挿図目次

Fig. 1 西弘小路遺跡調査区位置図	Fig. 12 SK1平面図・セクション図
Fig. 2 寛文己酉高知絵図（抜粋）	Fig. 13 SK1出土遺物実測図
Fig. 3 享和元年高知御家中等龜図（抜粋）	Fig. 14 SK2・3平面図・セクション図
Fig. 4 高知郭中図（抜粋）	Fig. 15 SK2出土遺物実測図
Fig. 5 西弘小路遺跡及び周辺の遺跡	Fig. 16 SK3出土遺物実測図（1）
Fig. 6 調査区位置図	Fig. 17 SK3出土遺物実測図（2）
Fig. 7 西弘小路遺跡調査区及び小区設定図	Fig. 18 SK3出土遺物実測図（3）
Fig. 8 基本層序（1）	Fig. 19 SK3出土遺物実測図（4）
Fig. 9 基本層序（2）・土層柱状図	Fig. 20 SK3出土遺物実測図（5）
Fig. 10 検出遺構全体図（南部・東部）	Fig. 21 SK3出土遺物実測図（6）
Fig. 11 検出遺構全体図（北部）	Fig. 22 SK3出土遺物実測図（7）

- Fig. 23 SK3出土遺物実測図 (8)  
 Fig. 24 SK3出土遺物実測図 (9)  
 Fig. 25 SK3出土遺物実測図 (10)  
 Fig. 26 SK3出土遺物実測図 (11)  
 Fig. 27 SK3出土遺物実測図 (12)  
 Fig. 28 SK3出土遺物実測図 (13)  
 Fig. 29 SK4・5平面図・セクション図  
 Fig. 30 SK4出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 31 SK4出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 32 SK5出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 33 SK5出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 34 SK6・7・12平面図・セクション図・エレベーション図  
 Fig. 35 SK6出土遺物実測図  
 Fig. 36 SK7出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 37 SK7出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 38 SK7出土遺物実測図 (3)  
 Fig. 39 SK8～11平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図  
 Fig. 40 SK8出土遺物実測図  
 Fig. 41 SK9・10出土遺物実測図  
 Fig. 42 SK11出土遺物実測図  
 Fig. 43 SK12出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 44 SK12出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 45 SK13～15平面図・セクション図・SK13出土遺物実測図  
 Fig. 46 SK17平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図  
 Fig. 47 SK17出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 48 SK17出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 49 SK17出土遺物実測図 (3)  
 Fig. 50 SK17出土遺物実測図 (4)  
 Fig. 51 SK18平面図・セクション図  
 Fig. 52 SK19平面図・セクション図  
 Fig. 53 SK19出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 54 SK19出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 55 SK19出土遺物実測図 (3)  
 Fig. 56 SK19出土遺物実測図 (4)  
 Fig. 57 SK19出土遺物実測図 (5)  
 Fig. 58 SK19出土遺物実測図 (6)  
 Fig. 59 SK19出土遺物実測図 (7)  
 Fig. 60 SK19出土遺物実測図 (8)  
 Fig. 61 SK19出土遺物実測図 (9)  
 Fig. 62 SK19出土遺物実測図 (10)  
 Fig. 63 SK19出土遺物実測図 (11)  
 Fig. 64 SK19出土遺物実測図 (12)  
 Fig. 65 SK19出土遺物実測図 (13)  
 Fig. 66 SK19出土遺物実測図 (14)  
 Fig. 67 SK19出土遺物実測図 (15)  
 Fig. 68 SK19出土遺物実測図 (16)  
 Fig. 69 SK19出土遺物実測図 (17)  
 Fig. 70 SK19出土遺物実測図 (18)  
 Fig. 71 SK19出土遺物実測図 (19)  
 Fig. 72 SK19出土遺物実測図 (20)  
 Fig. 73 SK19出土遺物実測図 (21)  
 Fig. 74 SK19出土遺物実測図 (22)  
 Fig. 75 SK20・21平面図・セクション図  
 Fig. 76 SK20出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 77 SK20出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 78 SK21出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 79 SK21出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 80 SK21出土遺物実測図 (3)  
 Fig. 81 SK22～25平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図  
 Fig. 82 SK24出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 83 SK24出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 84 SK25出土遺物実測図 (1)  
 Fig. 85 SK25出土遺物実測図 (2)  
 Fig. 86 SK25出土遺物実測図 (3)  
 Fig. 87 SK25出土遺物実測図 (4)  
 Fig. 88 SK25出土遺物実測図 (5)  
 Fig. 89 SK25出土遺物実測図 (6)  
 Fig. 90 SK25出土遺物実測図 (7)  
 Fig. 91 SK25出土遺物実測図 (8)  
 Fig. 92 SK25出土遺物実測図 (9)  
 Fig. 93 SK26平面図・エレベーション図・出土遺物実測図  
 Fig. 94 SK28平面図・セクション図・遺物出土状況図  
 Fig. 95 SK28出土遺物実測図  
 Fig. 96 SK29・30平面図・セクション図・エレベーション図

- Fig. 97 SK31～35平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 98 SK29～32出土遺物実測図
- Fig. 99 SK35出土遺物実測図
- Fig. 100 SK36・37平面図・セクション図
- Fig. 101 SK36出土遺物実測図(1)
- Fig. 102 SK36出土遺物実測図(2)
- Fig. 103 SK37出土遺物実測図(1)
- Fig. 104 SK37出土遺物実測図(2)
- Fig. 105 SK37出土遺物実測図(3)
- Fig. 106 SK37出土遺物実測図(4)
- Fig. 107 SK38・39平面図・セクション図
- Fig. 108 SK38出土遺物実測図
- Fig. 109 SK39出土遺物実測図(1)
- Fig. 110 SK39出土遺物実測図(2)
- Fig. 111 SK40・41・53平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 112 SK41出土遺物実測図
- Fig. 113 SK42平面図・エレベーション図
- Fig. 114 SK42出土遺物実測図
- Fig. 115 SK43・SX12・13平面図・セクション図
- Fig. 116 SK43出土遺物実測図(1)
- Fig. 117 SK43出土遺物実測図(2)
- Fig. 118 SK44～47平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 119 SK44・45出土遺物実測図
- Fig. 120 SK48・49平面図・セクション図
- Fig. 121 SK48・49出土遺物実測図
- Fig. 122 SK50・51平面図・セクション図
- Fig. 123 SK50出土遺物実測図(1)
- Fig. 124 SK50出土遺物実測図(2)
- Fig. 125 SK50出土遺物実測図(3)
- Fig. 126 SK50出土遺物実測図(4)
- Fig. 127 SK51出土遺物実測図(1)
- Fig. 128 SK51出土遺物実測図(2)
- Fig. 129 SK52平面図・セクション図
- Fig. 130 SK52出土遺物実測図(1)
- Fig. 131 SK52出土遺物実測図(2)
- Fig. 132 SK52出土遺物実測図(3)
- Fig. 133 SK52出土遺物実測図(4)
- Fig. 134 SK52出土遺物実測図(5)
- Fig. 135 SK54～56平面図・セクション図
- Fig. 136 SK53～56・60出土遺物実測図
- Fig. 137 SK57～60・63～65平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 138 SK66～71・79・SX17平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 139 SK67・68出土遺物実測図
- Fig. 140 SK69・70出土遺物実測図
- Fig. 141 SK72～76平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 142 SK72・74・76出土遺物実測図
- Fig. 143 SK77・78・80・81～83平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 144 SK77・78出土遺物実測図
- Fig. 145 SK80・81・83出土遺物実測図
- Fig. 146 SK84平面図・セクション図・遺物出土状況図
- Fig. 147 SK84出土遺物実測図(1)
- Fig. 148 SK84出土遺物実測図(2)
- Fig. 149 SK84出土遺物実測図(3)
- Fig. 150 SK84出土遺物実測図(4)
- Fig. 151 SK84出土遺物実測図(5)
- Fig. 152 SK84出土遺物実測図(6)
- Fig. 153 SK84出土遺物実測図(7)
- Fig. 154 SK84出土遺物実測図(8)
- Fig. 155 SK84出土遺物実測図(9)
- Fig. 156 SK84出土遺物実測図(10)
- Fig. 157 SK84出土遺物実測図(11)
- Fig. 158 SK84出土遺物実測図(12)
- Fig. 159 SK84出土遺物実測図(13)
- Fig. 160 SK84出土遺物実測図(14)
- Fig. 161 SK84出土遺物実測図(15)
- Fig. 162 SK84出土遺物実測図(16)
- Fig. 163 SK84出土遺物実測図(17)
- Fig. 164 SK84出土遺物実測図(18)
- Fig. 165 SK84出土遺物実測図(19)
- Fig. 166 SK84出土遺物実測図(20)
- Fig. 167 SK84出土遺物実測図(21)
- Fig. 168 SK84出土遺物実測図(22)
- Fig. 169 SK84出土遺物実測図(23)
- Fig. 170 SK84出土遺物実測図(24)

- Fig. 171 SK84出土遺物実測図 (25)
- Fig. 172 SK84出土遺物実測図 (26)
- Fig. 173 SK84出土遺物実測図 (27)
- Fig. 174 SK84出土遺物実測図 (28)
- Fig. 175 SK84出土遺物実測図 (29)
- Fig. 176 SK84出土遺物実測図 (30)
- Fig. 177 SK85~89平面図・セクション図
- Fig. 178 SK85出土遺物実測図
- Fig. 179 SK88出土遺物実測図
- Fig. 180 SK91~96平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 181 SK92・93出土遺物実測図
- Fig. 182 SK94~96出土遺物実測図
- Fig. 183 SK97~102平面図・セクション図
- Fig. 184 SK97出土遺物実測図 (1)
- Fig. 185 SK97出土遺物実測図 (2)
- Fig. 186 SK100出土遺物実測図 (1)
- Fig. 187 SK100出土遺物実測図 (2)
- Fig. 188 SK102出土遺物実測図
- Fig. 189 SK104・106~110平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 190 SK112~116平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 191 SK113・115・116出土遺物実測図
- Fig. 192 SK117~121平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 193 SK118出土遺物実測図
- Fig. 194 SK119・120出土遺物実測図
- Fig. 195 SK121出土遺物実測図 (1)
- Fig. 196 SK121出土遺物実測図 (2)
- Fig. 197 SK122平面図・エレベーション図
- Fig. 198 SK122出土遺物実測図
- Fig. 199 SK123・125~128平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図
- Fig. 200 SK124・126・127出土遺物実測図
- Fig. 201 SD1~10セクション図・エレベーション図
- Fig. 202 SD1出土遺物実測図
- Fig. 203 ピット列1~3平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 204 ピット列4~8平面図・エレベーション図・出土遺物実測図
- Fig. 205 P45・54・61・106・125・129・150・152平面図・セクション図・エレベーション図
- Fig. 206 P54・61・106・125・129出土遺物実測図
- Fig. 207 石列1~3・瓦溜1・2・SK124平面図・エレベーション図
- Fig. 208 SX4平面図・セクション図・エレベーション図・遺物出土状況図
- Fig. 209 SX4出土遺物実測図
- Fig. 210 SX11・16平面図・セクション図
- Fig. 211 SX11出土遺物実測図
- Fig. 212 SX12出土遺物実測図
- Fig. 213 SX13出土遺物実測図 (1)
- Fig. 214 SX13出土遺物実測図 (2)
- Fig. 215 SX16出土遺物実測図
- Fig. 216 SX17出土遺物実測図
- Fig. 217 SX22平面図・セクション図
- Fig. 218 SX22出土遺物実測図
- Fig. 219 瓦溜2出土遺物実測図 (1)
- Fig. 220 瓦溜2出土遺物実測図 (2)
- Fig. 221 瓦溜2出土遺物実測図 (3)
- Fig. 222 瓦溜3出土遺物実測図
- Fig. 223 包含層出土遺物実測図 (1)
- Fig. 224 包含層出土遺物実測図 (2)
- Fig. 225 包含層・搅乱層出土遺物実測図
- Fig. 226 西弘小路遺跡居住者の推定
- Fig. 227 絵図にみる西弘小路遺跡の変遷 (1)
- Fig. 228 絵図にみる西弘小路遺跡の変遷 (2)
- Fig. 229 西弘小路遺跡南部検出遺構の分布と変遷

## 表目次

Tab. 1~3	土坑一覧表	258
Tab. 4・5	ピット一覧表	261
Tab. 6~78	遺物観察表（陶磁器・土器）	263
Tab. 79・80	遺物観察表（石製品・金属製品・ガラス製品）	335
Tab. 81	遺物観察表（古錢）	337
Tab. 82~84	遺物観察表（瓦）	337
Tab. 85	遺物観察表（木製品）	340
Tab. 86	絵図・史料にみる西弘小路遺跡の変遷	351
Tab. 87	SK3出土遺物の器種別出土点数と組成比	368
Tab. 88	SK3陶磁器の生産地別出土点数と組成比	368
Tab. 89	SK17出土遺物の器種別出土点数と組成比	369
Tab. 90	SK17陶磁器の生産地別出土点数と組成比	369
Tab. 91	SK84出土遺物の器種別出土点数と組成比	370
Tab. 92	SK84陶磁器の生産地別出土点数と組成比	371

## 写真図版目次

卷頭図版 1	調査区風景、SX4遺物出土状況	PL.11 SK86・116セクション
卷頭図版 2	出土遺物（志野焼・織部焼）	PL.12 SD1遺物出土状況、ピット列1・P36・37
卷頭図版 3	出土遺物（尾戸焼・能茶山焼）	完掘状況
卷頭図版 4	出土遺物（肥前産陶磁器・中国産青花）	PL.13 P29柱痕検出状況、P45礫出土状況
卷頭図版 5	出土遺物（人形・玩具類）	PL.14 瓦溜2・石列1・3、石列1
卷頭図版 6	出土遺物（陶磁器・金属製品・木製品・瓦）	PL.15 SX4遺物出土状況、SX4セクション
PL. 1	調査区遠景、調査区風景	PL.16 SK1・3・5・6・7・20・25・28セクション
PL. 2	調査区東壁、東壁セクション	PL.17 SK32・35・38・41・43・48・50・SX12・13セクション、SK49完掘状況
PL. 3	東西バンク北壁とSX4焼土、東西セクションとSX4焼土	PL.18 SK50・77・78・118・120完掘状況、SK51・53・115セクション、SK127遺物出土状況、P5礫出土状況
PL. 4	東部完掘状況、東部完掘状況	PL.19 SK3・7・17遺物出土状況
PL. 5	南東部完掘状況、南東部完掘状況	PL.20 SK17・19遺物出土状況
PL. 6	SK3セクション、SK3完掘状況	PL.21 SK19・24・78・84遺物出土状況
PL. 7	SK8礫出土状況、SK17完掘状況	PL.22 SK84・SX4・瓦溜2遺物出土状況
PL. 8	SK19西部完掘状況、SK19遺物出土状況	PL.23 SK3出土遺物
PL. 9	SK77・78セクション、SK84	PL.24 SK3出土遺物
PL.10	SK84セクション及び遺物出土状況、SK84遺物出土状況	PL.25 SK3出土遺物
		PL.26 SK3・4出土遺物

PL.27	SK4・5出土遺物	PL.47	SK50出土遺物
PL.28	SK6・7・9・10出土遺物	PL.48	SK50・51出土遺物
PL.29	SK11・12・17出土遺物	PL.49	SK51・52出土遺物
PL.30	SK17出土遺物	PL.50	SK52・55・68出土遺物
PL.31	SK17・19出土遺物	PL.51	SK72・74・78・80・83出土遺物
PL.32	SK19出土遺物	PL.52	SK81・83・84出土遺物
PL.33	SK19出土遺物	PL.53	SK84出土遺物
PL.34	SK19出土遺物	PL.54	SK84出土遺物
PL.35	SK19出土遺物	PL.55	SK84出土遺物
PL.36	SK19出土遺物	PL.56	SK84出土遺物
PL.37	SK19出土遺物	PL.57	SK84出土遺物
PL.38	SK19出土遺物	PL.58	SK84出土遺物
PL.39	SK19・20出土遺物	PL.59	SK93・94・97・100・102・115・116出土 遺物
PL.40	SK21・24出土遺物	PL.60	SX4・12・13・P125出土遺物
PL.41	SK25出土遺物	PL.61	瓦溜2出土遺物
PL.42	SK25出土遺物	PL.62	瓦溜2・3・包含層Ⅱ層出土遺物
PL.43	SK28・29・32・35～37出土遺物	PL.63	SK84出土遺物
PL.44	SK37・38出土遺物	PL.64	現地説明会風景、作業風景
PL.45	SK38・39・41・43出土遺物		
PL.46	SK43・45・49・50出土遺物		

# 第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

西弘小路遺跡は高知市街地の中心部、高知城の西に位置する。ここは江戸時代には、上級・中級武士の居住専用区域とされた郭中にあたり、絵地図や古記録によって、近世初めから幕末まで武家屋敷が展開したことが分かっている。また近年は周辺での発掘調査が進み、高知城跡西側一帯の近世遺跡が確認されるとともに、周辺域での武家屋敷の実態が次第に明らかになってきている。

2007年、高知市民病院跡地への総合あんしんセンター建設工事が計画され、それに伴う埋蔵文化財の有無についての照会が高知市教育委員会を経由して、高知県教育委員会に対し提出された。これを受けて、高知市教育委員会では試掘確認調査を2007年9月18日から9月28日にかけて実施した。

工事予定地の10箇所に試掘坑を設定し、試掘調査を行った結果、数箇所の試掘坑において近世の遺構と遺物を検出した。この結果を受けて、高知県教育委員会と高知市が協議を行い、攪乱が著しい南西部を除くその他の範囲について、高知市教育委員会が発掘調査を実施することとなった。調査に際しては、旧建物の基礎撤去工事によって基礎枠内の遺構が破壊されることが予想されたため、発掘調査は基礎枠を残した状態で行った。本調査は10月1日から12月26日にかけて実施した。

なお、対象地はこれまで「郭中参考地」とされてきたものであるが、遺構、遺物の新たな発見により2007年11月から埋蔵文化財包蔵地として新設された。遺跡名称は近世以来の旧町名を用い「西弘小路遺跡」とした。

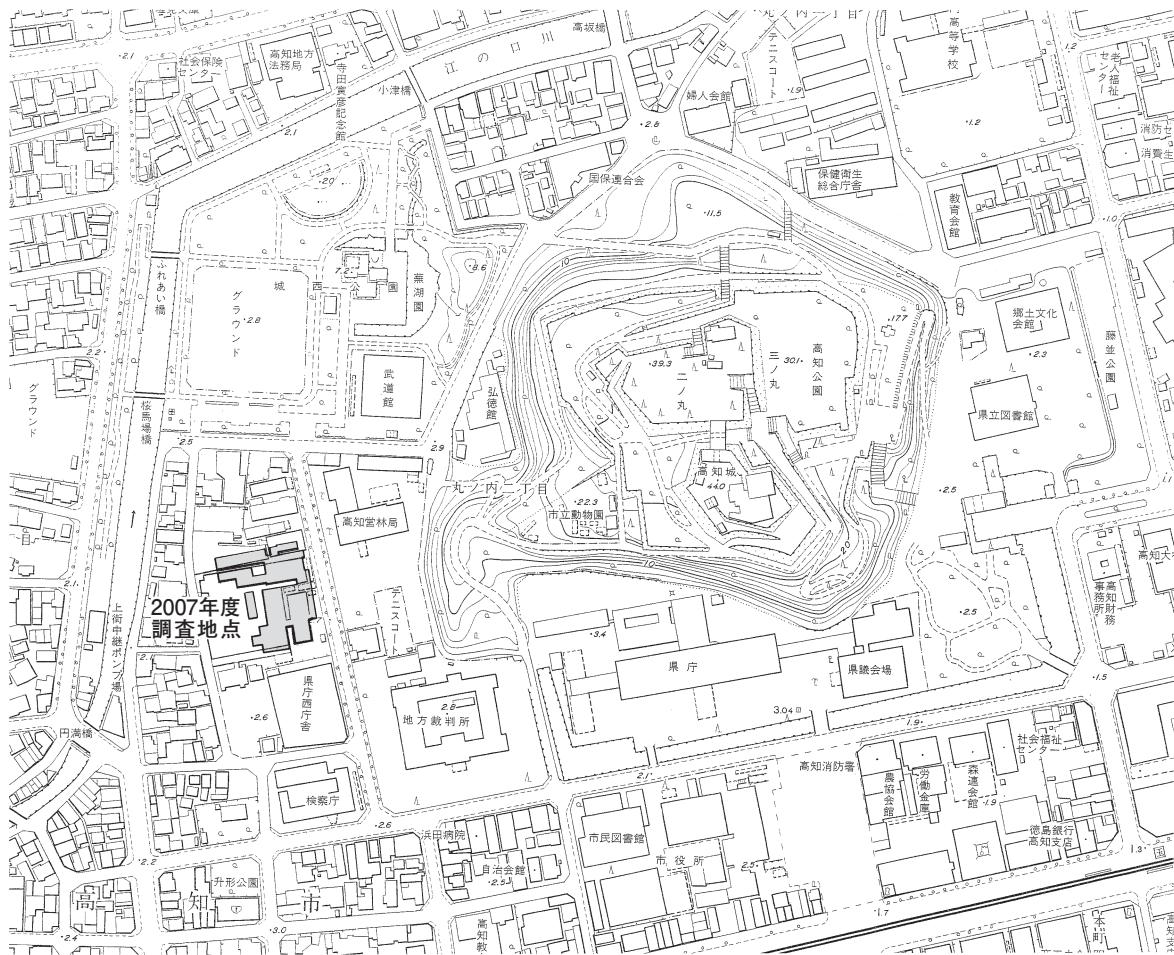


Fig.1 西弘小路遺跡調査区位置図

平成3年『高知広域都市圏』より抜粋。一部修正。

(S=1/5,000)

## 第Ⅱ章 遺跡の地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

高知市は土佐湾に面し、東部には高知平野が広がり、市域の西部及び北部は東西に山地が連なる。河川は、鏡川が市の西北部から湾曲しながら東流して浦戸湾に注ぎ、国分川が南国市北部及び香美市西部域から西流し、江の口川、舟入川を合わせて浦戸湾に注いでいる。現平野部のほとんどは古くは内海であったが、その後鏡川などの堆積や隆起、干拓による埋め立てなどによって、近世以降ほぼ現在の状態になったものである。

高知城跡が立地する高知市の中心市街地は、北部は標高400～600mの東西に連なる山地、南方を300m級の帯状の山地、西方をなだらかな丘陵によって囲まれた平野部にあり、周囲には大高坂山、小高坂山、能茶山、比島山、葛島山などの小分離丘陵が存在している。しかし、かつては鏡川によって形成された三角州上に広がる低湿地であったため、平野部の土地は総体的に低く、集中豪雨、台風、津波による水害が繰り返されてきた地域でもある。一方で、平野部に内陸深く入り込む浦戸湾は自然の良港となり、近世には、浦戸湾に注ぐ鏡川、江の口川の水運によって、交通至便の立地環境を得ることとなった。

### 2. 歴史的環境

#### 周辺の遺跡

縄文時代の遺跡としては、高知市北部の丘陵に位置する福井遺跡、宇津野遺跡で縄文時代の遺物が検出されている。また、長浜チドノ遺跡から縄文前期の羽島下層式土器、正蓮寺不動堂前遺跡からは縄文中期初頭の舟元I式土器や礫石錘、縄文後期～晩期の条痕文土器や磨研土器、高知市西部の柳田遺跡からは縄文後期～晩期の土器が出土している。

弥生時代には、福井遺跡、高知学園裏遺跡、初月遺跡、北秦泉寺遺跡など、丘陵沿いを中心に遺跡が増加する。また、柳田遺跡では弥生前期の大篠式土器などが出土している。弥生時代中期から後期にかけては、山地・丘陵部に立地するかろーと口遺跡、城山遺跡、高天原遺跡などがある。注目されるものとして、県下最古の中広形銅矛2本が池地区の長崎より、県下唯一の有柄式石剣と片刃石斧が北秦泉寺遺跡より出土している。また、尾戸遺跡からも弥生前期の大型蛤刃石斧の出土が確認されている。

古墳時代では、北部山麓に吉弘古墳、愛宕不動堂前古墳、宇津野1号墳、2号墳等の後期古墳が点在する秦泉寺古墳群が存在する。また、高知市西部から南部にかけての丘陵部には、7世紀中葉の横穴式石室をもつ朝倉古墳や、塚ノ原古墳群が存在する。また、平野部においては、中島町遺跡や西秦泉寺遺跡などの遺跡が確認されている。

古代では、白鳳～奈良時代の瓦を出土する秦泉寺廃寺跡がある。この他にも、高知学園裏遺跡や東久万池田遺跡、吉弘遺跡、松葉谷遺跡等がある。記録の上では、高知市中心部の北西側に高坂郷が成立し、以後中世にかけて、南側の低湿地へと開拓が進んでいったものと推察される。

中世には、大高坂城跡、福井中城跡、万々城跡、安楽寺山城跡など、多くの山城が丘陵部に立地

するようになる。大高坂城跡は南北朝期に土佐の南朝方として活躍した大高坂氏の居城である。大高坂氏が暦応2年～3年（1339～1340）に北朝方の攻撃を受け敗退した<sup>(註1)</sup>後は、天正16年（1588）に長宗我部元親が岡豊城から大高坂山に移り、その後同氏が浦戸へ移る天正19年（1591）までの間、大高坂山が長宗我部氏の居城となった。天正16年『長宗我部地検帳』の『大高坂之村地検帳』には「弓場ヤシキ」「大テンスノ下」「御土居」などの記載がみられ、城下町形成の様子が窺われる。高知城三ノ丸跡の平成16年度発掘調査では、現存する東石垣の背面で長宗我部の時代に遡る天正期の石垣が検出され、桐文軒丸瓦も出土している。

近世の遺跡では、高知城跡の他、高知城伝下屋敷跡、弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などが確認されている。高知城は享保12年に焼失するが再建され、現在、国の重要文化財に指定されている。平成5年度の御台所屋敷跡の発掘調査では、ピット、礎石、溝、石垣などの遺構が検出されている。城下町では、藩関連の屋敷跡である高知城伝下屋敷跡、上級～中級武士の屋敷跡である弘人屋敷跡、金子橋遺跡、西弘小路遺跡などの調査が行われ、近世城下町の様相が次第に明らかになってきている。近世の窯跡には、尾戸窯跡、能茶山窯跡がある。尾戸窯は高知城の北西に位置する尾戸の地に、承応2年（1653）に開かれた藩の陶器窯で、文政5年（1822）に窯場が能茶山に移転する。文政3年（1820）には、城下の西方に位置する能茶山に能茶山磁器窯と陶器窯が開かれている。

開成館跡は慶応2年（1866）に土佐藩が創立した勧業貨殖および技術教育の統括機関であり、慶応3年に山内容堂と英公使の通訳官アーネスト・サトウとの会見がなされた。明治初期には外客接待の場として「寅賓館」と改まり、明治4年（1871）に、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允、杉孫三郎と板垣退助、福岡孝弟による、会談が行われている。

### 築城と近世城下町の形成

関ヶ原合戦後、土佐国を与えられた山内一豊は、慶長6年（1601）に長宗我部氏の居城であった浦戸城に入城した。その後、国内統治の要衝の地として大高坂山を城地に選び、慶長6年9月に築城を開始した。慶長8年（1603）には、本丸の建物と二ノ丸石垣までが竣工し、慶長16年（1611）に三ノ丸が完成して高知城の竣工に至った。築城当初、城山の名称は「河中山」とされたが、城下がたびたびの水害に悩まされたためその名を忌んで、慶長15年（1610）に「高智山」と改めた。

正保年間（1644～1648）の『正保城絵図』<sup>(註2)</sup>、及び慶安5年（1652）の『慶安五年高知郭中絵図』<sup>(註3)</sup>によると、城の南側と西の搦手門付近には下屋敷があり、南東及び北東には侍屋敷が置かれていた。また、寛文9年（1669）の『寛文己酉高知絵図』<sup>(註4)</sup>（Fig.2）では、城の南東に「御馬場」、東北には江ノ口川に接して「御米蔵」「御作事場」などの藩の施設がみえている。

これらを囲んで、城の東・西・南に内堀が巡らされ、北は江ノ口川が堀としての役割を果たした。城門は東西南北の4棟が設けられ、東を追手とし、西を搦手とした。

築城に並行して、城下町の造営も進められた。南の鏡川と北の江の口川を天然の外堀とし、東側と西側は新たに堀を設けて外堀とした。これらの外堀に囲まれる区域が郭中とされ、上級・中級武士の居住区となった。さらに郭中を挟んで、西には上町、東には下町を配した。上町は主に足軽、武家奉公人など下士の者を住まわせ、下町には武士の生活を賄うための町人の居住地区が設けられ

た。上町、下町と郭中との境界は、東は廿代橋より南に堀詰を経て鏡川に至る線、西は江の口川より南に金子橋、築屋敷に至る線がこれにあたり、郭中との境には外堀とともに、土堤を築いて両者を区画している。

### 高知城西側の景観と変遷

高知城の西側には、城の西大門から西に向かって延びる「西大門筋」と、内堀に並行して南北に延びる筋があり、筋に面して侍屋敷が並んだ。寛文9年(1669)の『寛文己酉高知絵図』(Fig.2)には、南北の筋の両側に侍屋敷が描かれており、西側の並びには北から「若尾」「樅井」「神戸」「第十」、東側の並びには「桑山」「福岡」氏の侍屋敷が見えている。

しかしその後、元禄11年(1698)10月6日、北奉公人町から出火した火災が城下に広がり、北奉公人町、内堤、帶屋町筋、大門筋、本町筋、中島町、与力町、南片町の侍屋敷176軒、町屋1933軒、貸家2000軒余り、寺19、橋12箇所が焼失する被害<sup>(註5)</sup>となった。さらに火勢は城内にも及び、下屋敷、太鼓丸が焼失した。この大火の後、内堀の外に接していた、南北筋東側の侍屋敷は取り払われ、南北の筋は広小路となった。<sup>(註6)</sup>また、享保12年(1727)2月の大では、小高坂越前町から出火して城内に及び、追手門他の数棟を除いて城郭の大部分が焼失した。火災は尾戸から大川筋、愛宕町、一手は京町、種崎町、農人町、山田町、鉄砲町にも及び、被害は侍屋敷205軒、町屋1163戸、郷分397戸に達した。この享保の大の後、延享4年(1747)9月27日には、城門の呼称が変更される<sup>(註7)</sup>とともに、搦手側の「西大門筋」も「西弘小路」と改められた。

広小路の西側に面しては、引き続き侍屋敷が設けられた。享和元年(1801)絵図(Fig.3)では、北から「若尾」「黒田」「若尾」「不破」氏の屋敷が見える。また、幕末頃の高知郭中図(Fig.4)でも250～350石の御馬廻である「若尾」「黒田」「若尾」「不破」氏の屋敷が残されている。広小路の東側では、嘉永年間(1848～1854)に、堀西側に南北九十六間東西八間の馬場が設けられた。<sup>(註8)</sup>

### 近代以降

近代以降、広小路の東側の敷地は旧営林局、裁判所などの国有地となった。西側の敷地では、潮江の市立伝染病隔離病舎が明治31年に西弘小路に移転し、市立城西病院と改称された。昭和24年には伝染病科と一般病科を設置して市立厚生病院と改め、翌年には市立市民病院と改称し、その後も診療科目を増設して、昭和38年に医療法の定める総合病院となった。昭和44年には診療棟、病棟その他施設の改良工事が竣工され、診療設備を拡充し、市民病院は地域医療の中核としてその機能を果たすこととなった。

### [註]

- 1) 『蠹簡集拾遺』
- 2) 『正保城絵図』 国立公文書館所蔵
- 3) 『慶安五年高知郭中絵図』 高知市民図書館所蔵
- 4) 『寛文己酉高知絵図』 高知市民図書館所蔵
- 5) 『南路志』 卷七十「十月六日出火、御侍屋敷焼失之覚」
- 6) 『高知市沿革畧史』 『高知市沿革畧史』は松野尾章行著、濱口真澄校の自筆本で、明治35年成稿。
- 7) 『皆山集』
- 8) 『高知市沿革畧史』

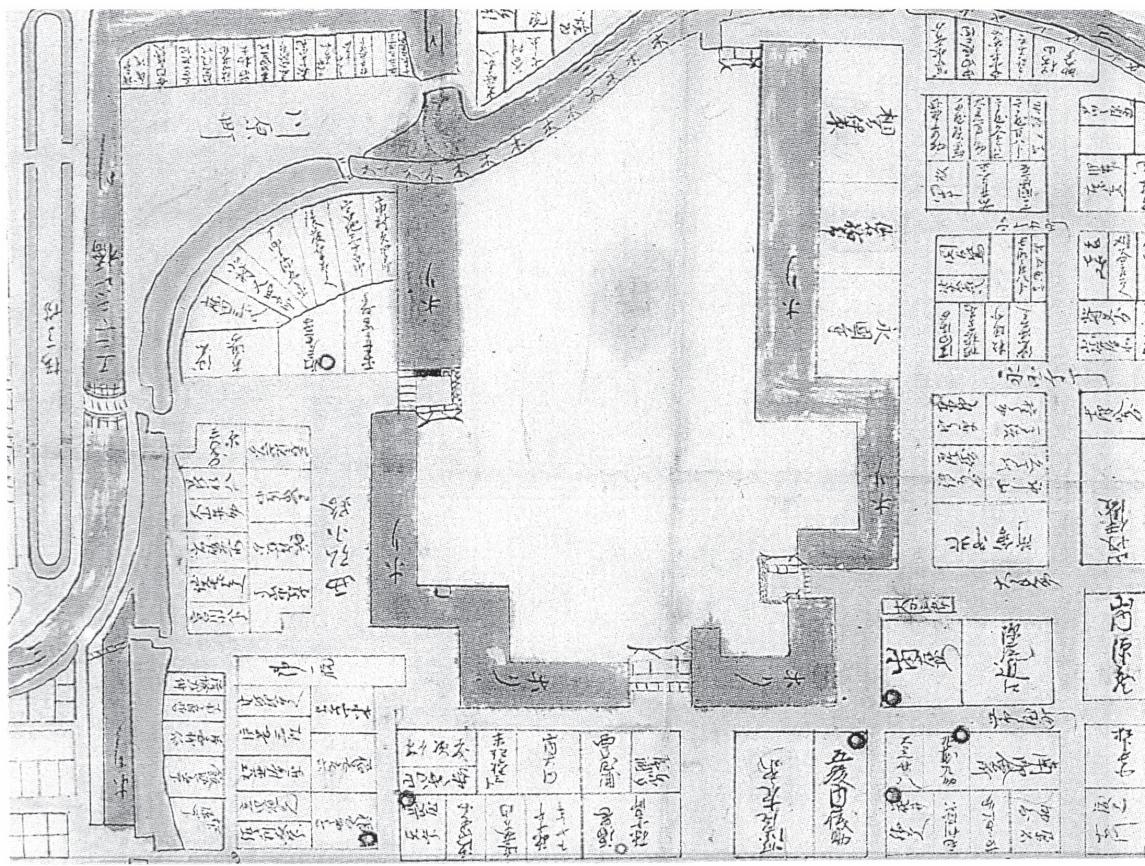
### [参考文献]

- 平尾道雄「第二編 近世」『高知市史 上巻』高知市1958年  
『高知県の地名』平凡社1983年  
『角川日本地名大辞典39高知県』角川書店1986年  
『高知城下町読本－改訂版－』土佐史談会・高知市教育委員会2004年  
『特別展－絵図の世界』安芸市立歴史民俗資料館1998年  
『史跡高知城跡1－高知市立動物園跡地の史跡整備化に伴う御台所屋敷跡発掘調査報告書』高知県教育委員会  
1994年  
『高知城跡－伝御台所屋敷跡史跡整備に伴う発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 1995年  
『高知城三ノ丸跡－石垣整備事業に伴う試掘確認調査概要報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2001年  
『高知城伝下屋敷跡－高知地家簡裁庁舎敷地埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター  
2002年  
『史跡高知城跡－本丸石垣整備事業報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2004年  
『史跡高知城跡－丸ノ内綠地試掘確認調査報告書』高知県文化財団埋蔵文化財センター 2006年  
『尾戸窓跡』高知市教育委員会2007年  
『開成館』高知市教育委員会2007年  
『金子橋遺跡』高知市教育委員会2008年



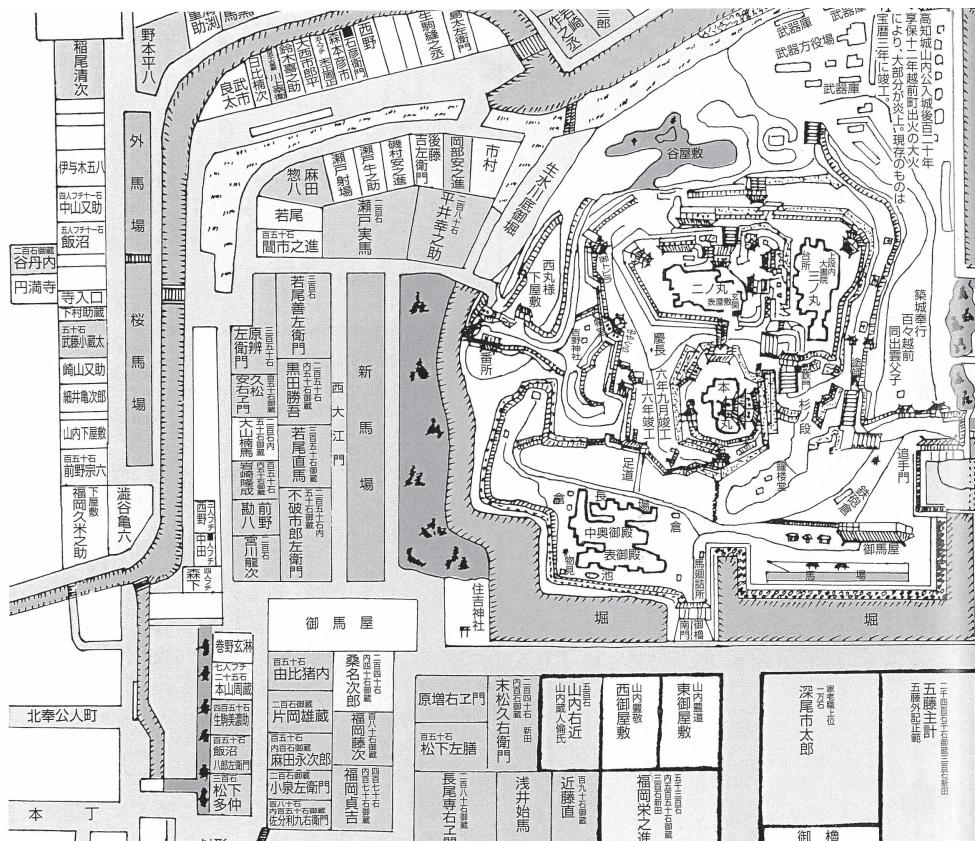
(高知市立市民図書館平尾文庫所蔵)

Fig.2 寛文己酉高知絵図 (抜粋)



(安芸市立歴史民俗資料館所蔵。『特別展－絵図の世界』より転載。)

Fig.3 享和元年高知御家中等龜図 (抜粋)



(幕末の高知郭中図をもとに活字化。『高知城下町読本』より転載。)

Fig.4 高知郭中図 (抜粋)



■ 郭中参考地

Fig.5 西弘小路遺跡及び周辺の遺跡

(S = 1/40,000)

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
151	西弘小路遺跡	近世	046	福井元尾城跡	中世	075	秦泉寺廃寺跡	古代
016	舟岡山遺跡	弥生	048	からーと口遺跡	弥生	076	土居の前古墳	古墳
017	舟岡山古墳	古墳	049	福井別城跡	中世	077	前里城跡	中世
018	神田南城跡	中世	050	福井古墳	古墳	078	宇津野2号墳	古墳
019	ケジカ端遺跡	弥生	053	嘉武保宇城跡	中世	079	宇津野1号墳	古墳
020	高座古墳	古墳	055	福井遺跡	繩文～中世	080	宇津野遺跡	繩文
022	鷺泊橋付近遺跡	弥生～中世	056	初月遺跡	弥生	081	秦泉寺新屋敷古墳	古墳
023	シルタニ遺跡	弥生～古代	057	万々城跡	中世	082	吉弘遺跡	古代
024	高神遺跡	古墳・古代	060	南御屋敷跡	近世	083	松葉谷遺跡	古代～中世
025	神田遺跡	弥生～中世	061	中島町遺跡	古墳	084	薊野遺跡	古代
026	神田ムク入道遺跡	弥生～中世	062	国沢城跡	中世	085	日の岡古墳	古墳
029	鴨部遺跡	弥生	063	大高坂城跡・高知城跡	中世～近世	086	北秦泉寺遺跡	弥生
030	神田旧城跡	中世	064	弘人屋敷跡	近世	087	渕谷古墳	古墳
031	龍茶山窯跡	近世	065	帯屋町遺跡	古墳	088	秦泉寺城跡	中世
032	石立城跡	中世	066	尾戸窯跡	弥生	089	秦泉寺仁井田神社裏古墳	古墳
033	久寿崎ノ丸遺跡	弥生～中世	067	尾戸窯跡	近世	090	薊野城跡	中世
034	小石木町遺跡	弥生	068	安楽寺山城跡	中世	136	一宮別城跡	中世
035	小石木山古墳	古墳	069	東久万池田遺跡	古代～中世	146	高知城伝下屋敷跡	古墳～近世
036	潮江城跡	中世	070	愛宕不動堂前古墳	古墳	149	金子橋遺跡	近世
040	井口城跡	中世	071	秦小学校校庭古墳	古墳	150	開成館跡	近世～近代
043	高知学園裏遺跡	弥生～古代	072	愛宕神社裏古墳	古墳			
044	福井西城跡	中世	073	西秦泉寺遺跡	古墳			
045	福井中城跡	中世	074	秦泉寺別城跡	中世	A02	国指定史跡高知城跡	近世

### 第Ⅲ章 調査の方法

調査区の大部分は市民病院の建物跡地にあり、地下には建物基礎と基礎枠が残存していた。基礎撤去の際に近世遺構の多くが破壊される恐れがあったため、発掘調査は基礎を残した状態で行うこととした。旧病院建物部分の調査においては、基礎枠をもとに60の小区に分け、遺構掘削と包含層遺物の取り上げを行った。一方、病院建物外にあたる調査区南東部については、世界測地系公共座標に基づく4m×4mの方眼区画を設定し、それをもとに包含層遺物の取り上げを行った。

調査においては、重機を用いて表土と搅乱層を除去し、その後、人力にて検出作業と遺構掘削を行った。近世遺構面以下の無遺物層については、重機による掘削を行い、近世以前の遺構と遺物の有無を確認した。検出された遺構については、土層観察を行うとともに土層図と平面図を作成し、写真撮影を行った。遺構の測量については、旧基礎枠内では光波測量を併用し、調査区南東部では世界測地系公共座標に基づく4m×4mの方眼区画をもとに実測を行った。平面実測及び土層断面図については、20分の1を基本に適時任意の縮尺を用いた。

水準については、高知市丸ノ内1-2-20に設置されている一等水準点より導いた。また、都市再生街区基本調査により設定された基準点を利用して多角測量を行い、調査対象地内にて座標を測定した。

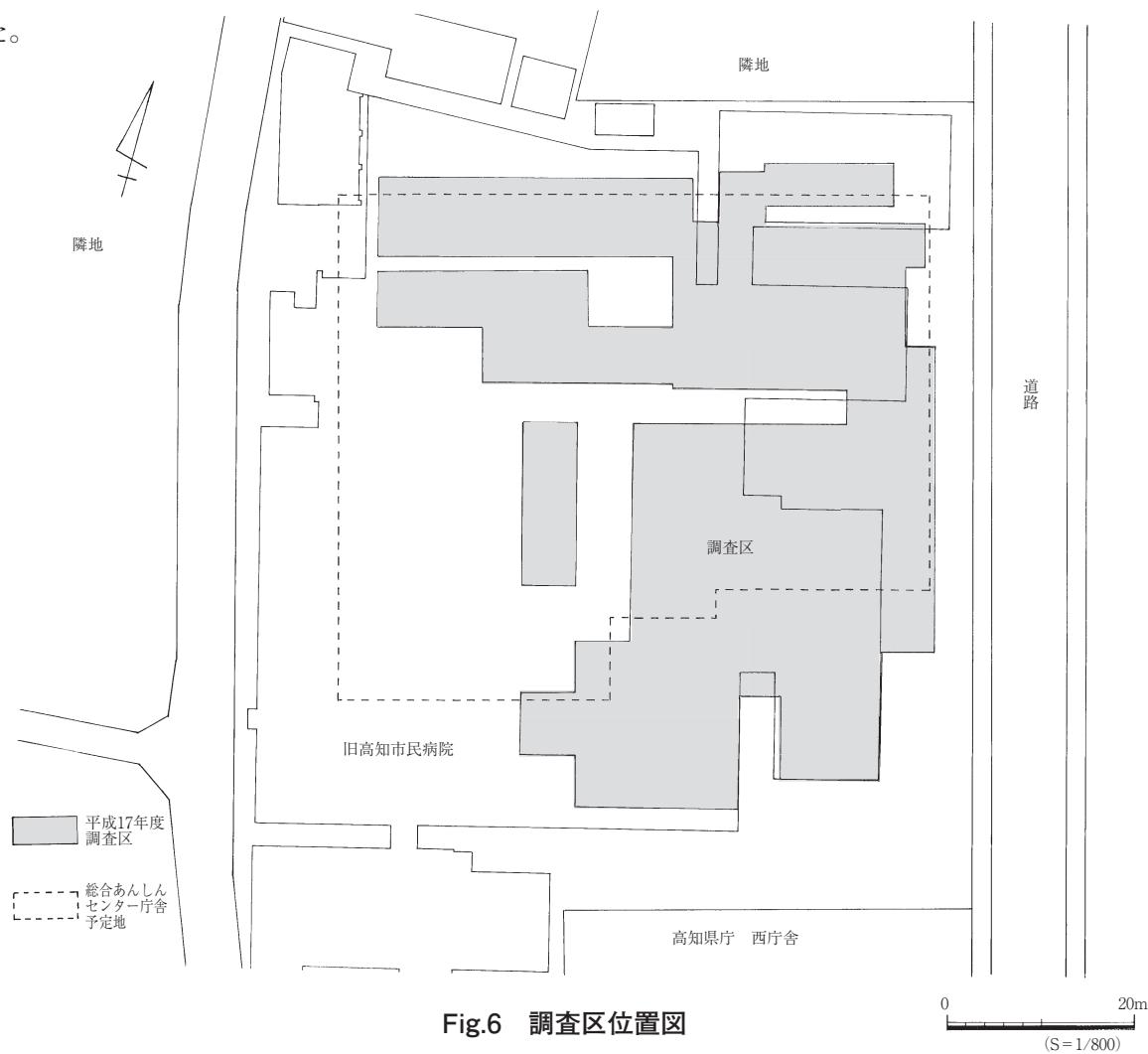


Fig.6 調査区位置図

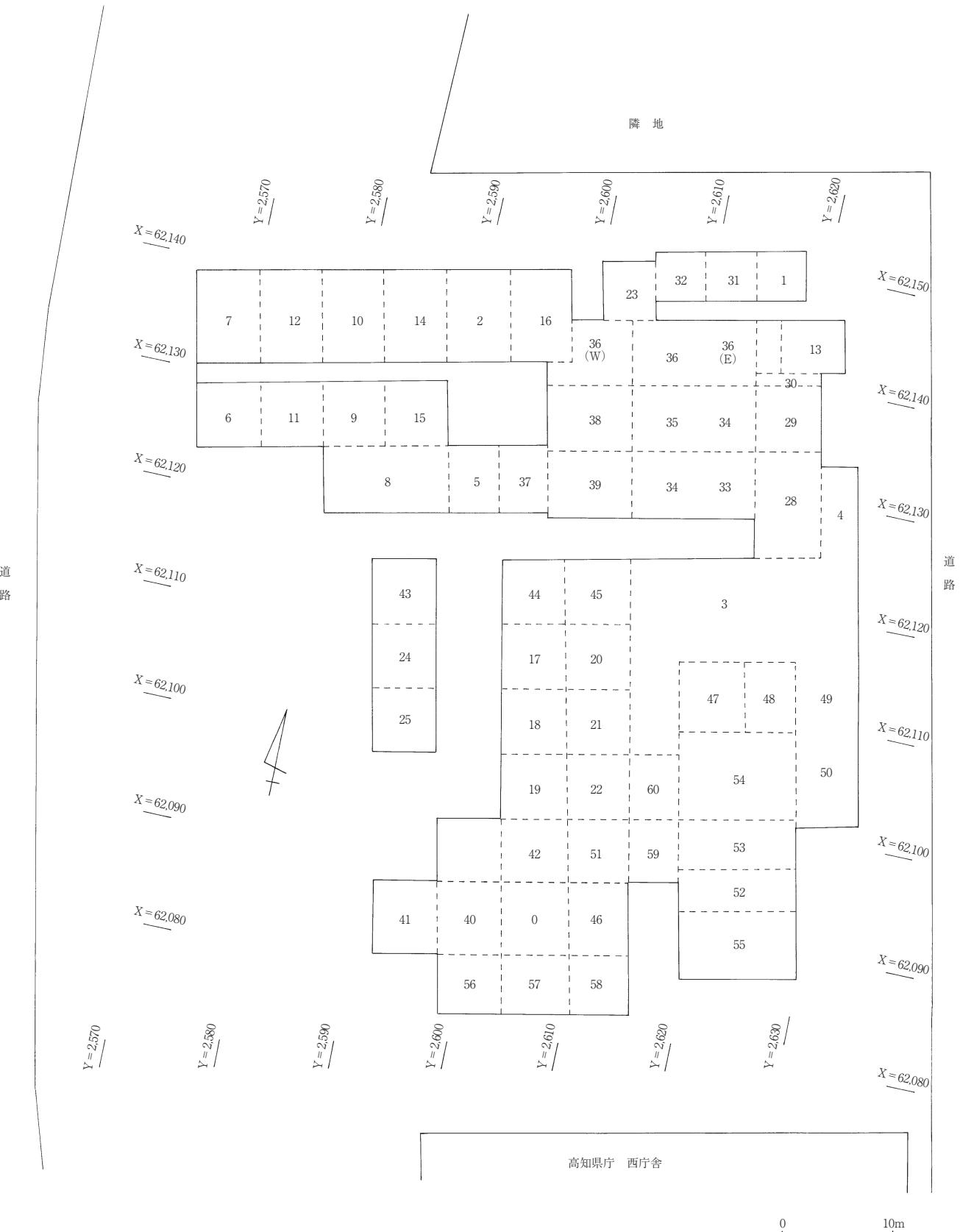


Fig.7 西弘小路遺跡調査区及び小区設定図

## 第Ⅳ章 調査の成果

### 第1節 基本層序

本調査区は旧高知市民病院の構内にあるため、地下の搅乱が著しく、特に調査区北部側と西部側では深い部分にまで搅乱層が及んでいた。そこで、旧病院建物基礎の外側部分にあたり、近世の遺物包含層が良好に残存する調査区東部付近において、東西バンク（A-A'）と調査区東壁（B-B'）の堆積状況を観察した。また、調査区全体の状況を把握するために、中央部（D-D'）、西部（E-E'・F-F'）、北西部（C-C'）、北東部（G-G'）、北部（H-H'）の堆積状況を、セクション図と柱状図にて示し補足した。

東西バンク（A-A'）、調査区東壁（B-B'）による、基本層序の内容は次の通りである。

I層：灰黄褐色砂礫（粘質シルトに円礫を多量に含む。）

II層：灰黄褐色シルト（0.5～1cm大の円礫と炭化物を少量含む。）

III-1層：にぶい黄褐色シルト、III-2層：にぶい黄褐色砂質シルト

IV-1層：にぶい黄褐色砂（シルトに砂が混じる。）

IV-2層：褐灰色砂礫（砂に0.5～2cm大の円礫が多量に混じる。）

I層は近・現代の整地層及び搅乱層で、瓦片、煉瓦、陶磁器など、近世から現代までの遺物を多く含む。II層は近世の遺物包含層にあたり、江戸前期から後期までの遺物片を含んでいる。III-1・III-2層は近世以前の堆積層とみられるが、無遺物である。IV-1・IV-2層も無遺物で、氾濫堆積層とみられる。

これによると、現在の地表面はI層によって整地されており、近世の遺物包含層であるII層は、その直下で検出されている。このII層の最上面は、良好に残存する調査区東壁（B-B'）で標高2.2～2.4mのレベルで検出されているが、これについては、調査区の南西部側でも幕末の石列遺構（石列2・3）が標高2.2～2.3mの面に乗るように検出されており、幕末頃の生活面は標高2.3m前後、すなわち現在の地表面より0.6m程下位に広がっていたものと推定される。近世の遺構はこのII層内から掘り込まれ、III～IV層に及んでいる。一方、西部（E-E'・F-F'）、北西部（C-C'）、北東部（G-G'）、北部（H-H'）では、近・現代の搅乱が深部まで及び、II層とIII層は残存しない。そのため、大型土坑を除くその他の浅い遺構については、殆どが削平されたと推察される。

なお、今次調査区では、II層の最上面から20cm程下位の面で、享保12年（1727）大火に伴うと推定される焼土層が数箇所で確認されている。図A-A'に見える、焼土溜まりSX4の上面に堆積するII層については、18世紀前葉以降の整地層として把握でき、他のII層についても、大火層を挟んで、18世紀前葉以前と以後の堆積層に分けることができよう。しかし、火災層の広がりは一部に止まっており、その他の地点では、大火以前と以後の堆積層を分けることができない。

各地点ともIII層以下は無遺物で、本調査地点では、中世以前に遡る遺物包含層は確認できなかつた。IV層は砂と川砂利の互層堆積で、中世以前には、本地点が河川氾濫の影響を強く受ける立地環境にあったと思われる。

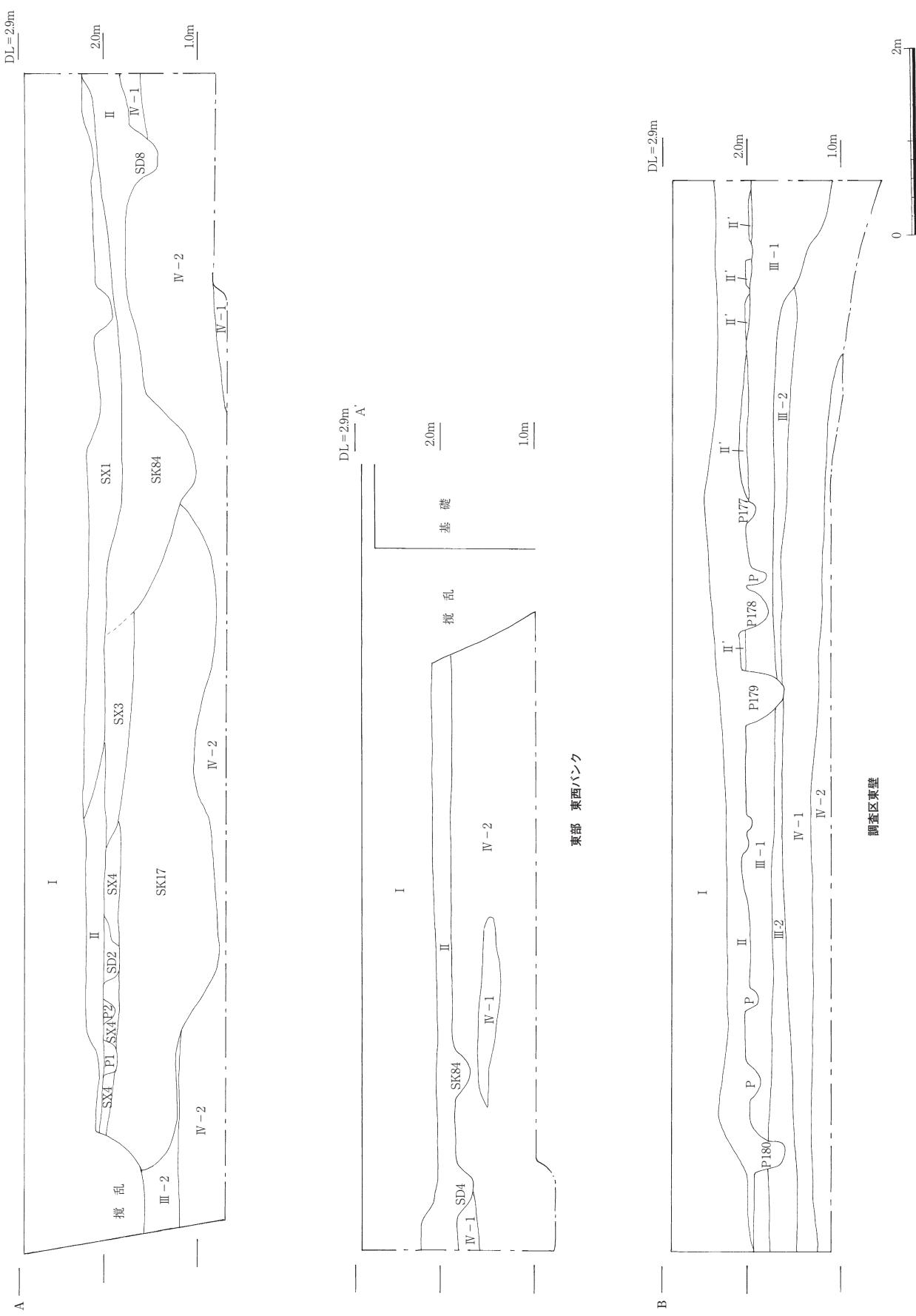


Fig.8 基本層序 (1)

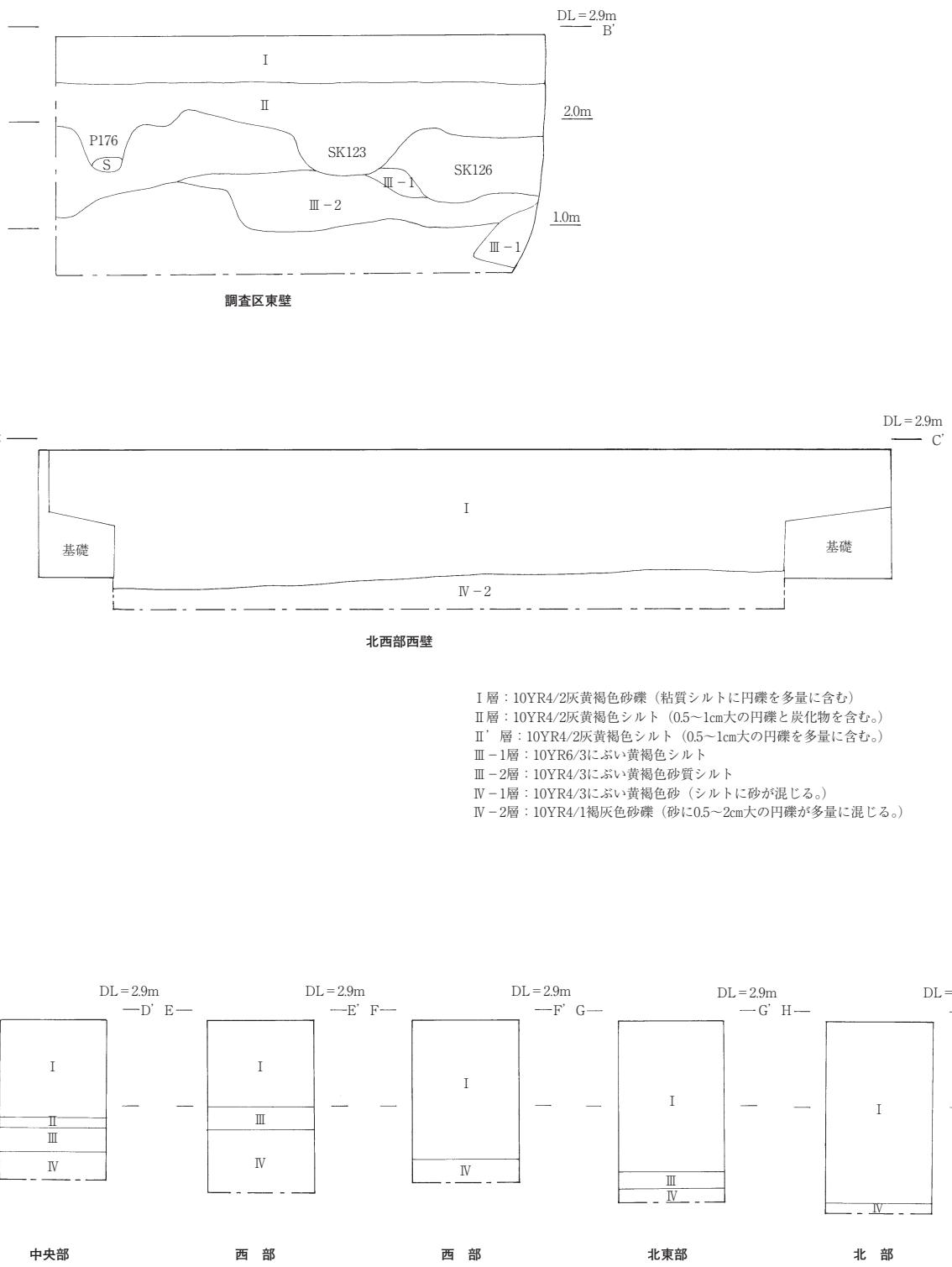


Fig.9 基本層序 (2)・土層柱状図





Fig.10 検出遺構全体図（南部・東部）

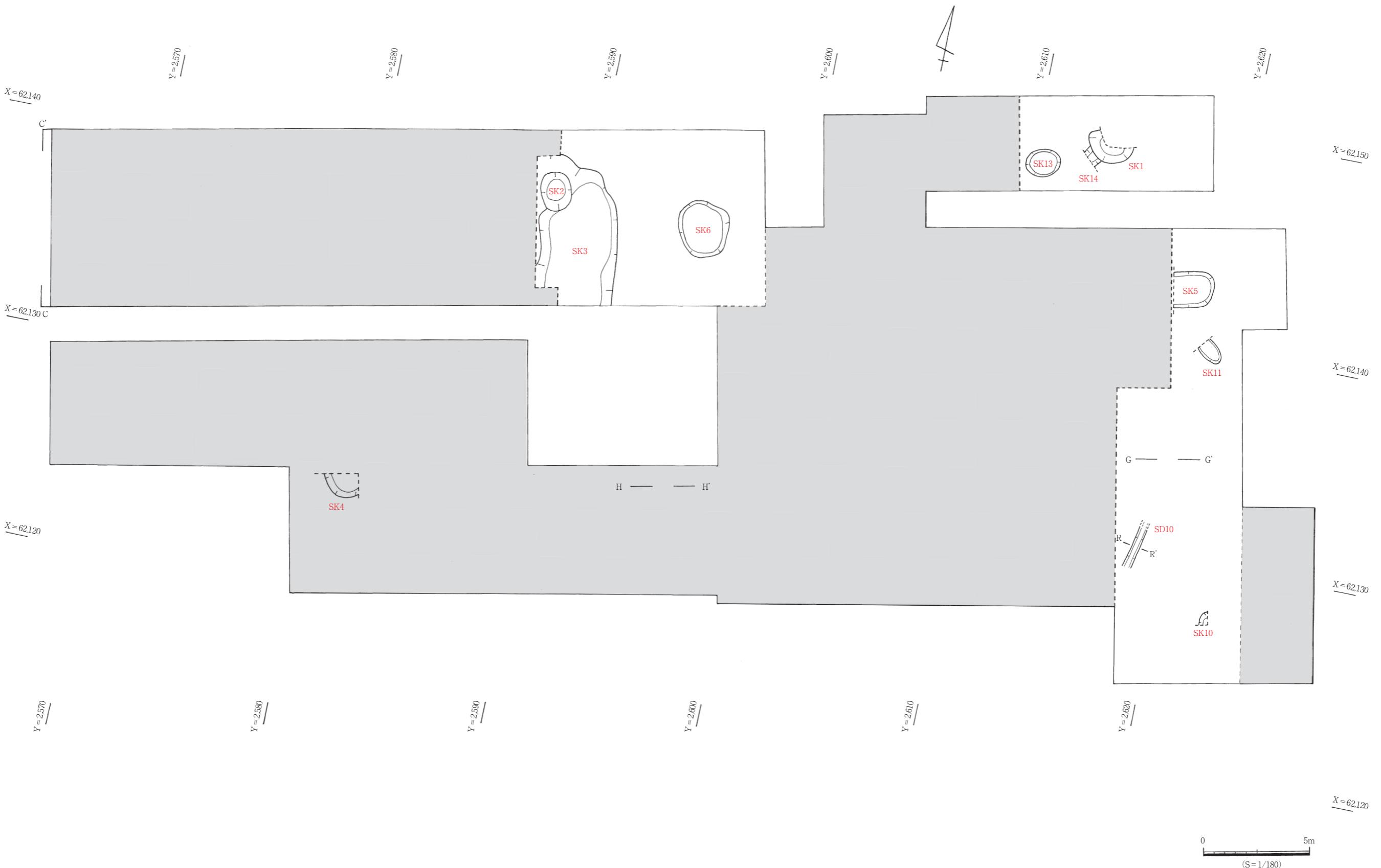


Fig.11 検出遺構全体図（北部）

## 第2節 遺構と遺物

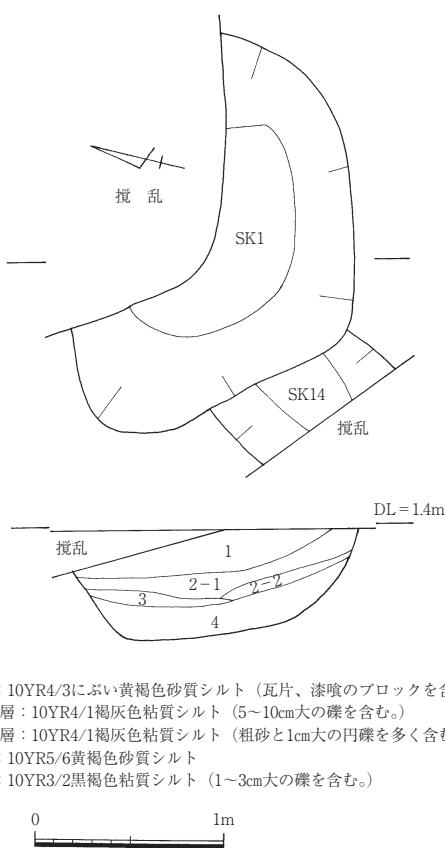
今回の調査区では、東部と南部側にて近世の遺物包含層が比較的良好に残存しており、近世の遺構を多く検出した。検出遺構は、土坑121基、溝状遺構10条、ピット180個、ピット列9列、性格不明遺構4基、焼土溜まり3箇所、瓦溜まり2箇所である。このうち溝及びピット列については、N-11°-Wの軸方向をもつものが多く検出され、現在の東側道路とも軸方向がほぼ揃っている。

検出遺構が調査区東部側に集中することについては、多くは調査区の西部から北部側が建物の建て替え等による地下の搅乱を強く受けたことによる。しかし、近世の包含層Ⅱ層が残存した調査区中央部付近（Fig.7-第17・18・40小区）においても、検出遺構の密度が際立って少ない箇所があることが看取できており、未検出であった礎石建物からなる居住空間と、廃棄土坑が集中する庭空間など、屋敷地内における空間利用の在り方が、検出遺構の分布状況にも一定反映されているといえよう。

なお、土坑とピットの一部については、検出位置、規模、年代等の一覧（Tab.1～5）を章末に示している。

### (1) 土坑

SK1 (Fig.12・13)



1層：10YR4/3にぶい黄褐色砂質シルト（瓦片、漆喰のブロックを含む。）  
2-1層：10YR4/1褐色灰色粘質シルト（5~10cm大の礫を含む。）  
2-2層：10YR4/1褐色灰色粘質シルト（粗砂と1cm大の円礫を多く含む。）  
3層：10YR5/6黄褐色砂質シルト  
4層：10YR3/2黒褐色粘質シルト（1~3cm大の礫を含む。）

調査区北部に位置する。北部側が搅乱を受けるため全体の形状は不明であるが、検出規模は長軸1.52m、短軸の確認長0.9m、深さ58cmを測る。断面形態は皿状である。埋土はにぶい黄褐色砂質シルト他であり、埋土中には多量の瓦片と漆喰のブロックを含んでいる。切り合い関係ではSK14を切っている。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗1・小杯2・小皿7・中皿1・鉢1・蓋物1・蓋物蓋1・段重1・中瓶1・不明2）、陶器（中碗3・小皿3・擂鉢2・鍋7・土瓶4・蓋1・甕2・壺又は甕3・火鉢1・台付灯明皿1・不明3）、土器（杯2・小皿3・羽釜1・火鉢1・不明1）、及び多量の瓦片で、19世紀を中心に、17世紀初頭から19世紀中葉までの遺物が含まれる。

Fig.12 SK1平面図・セクション図

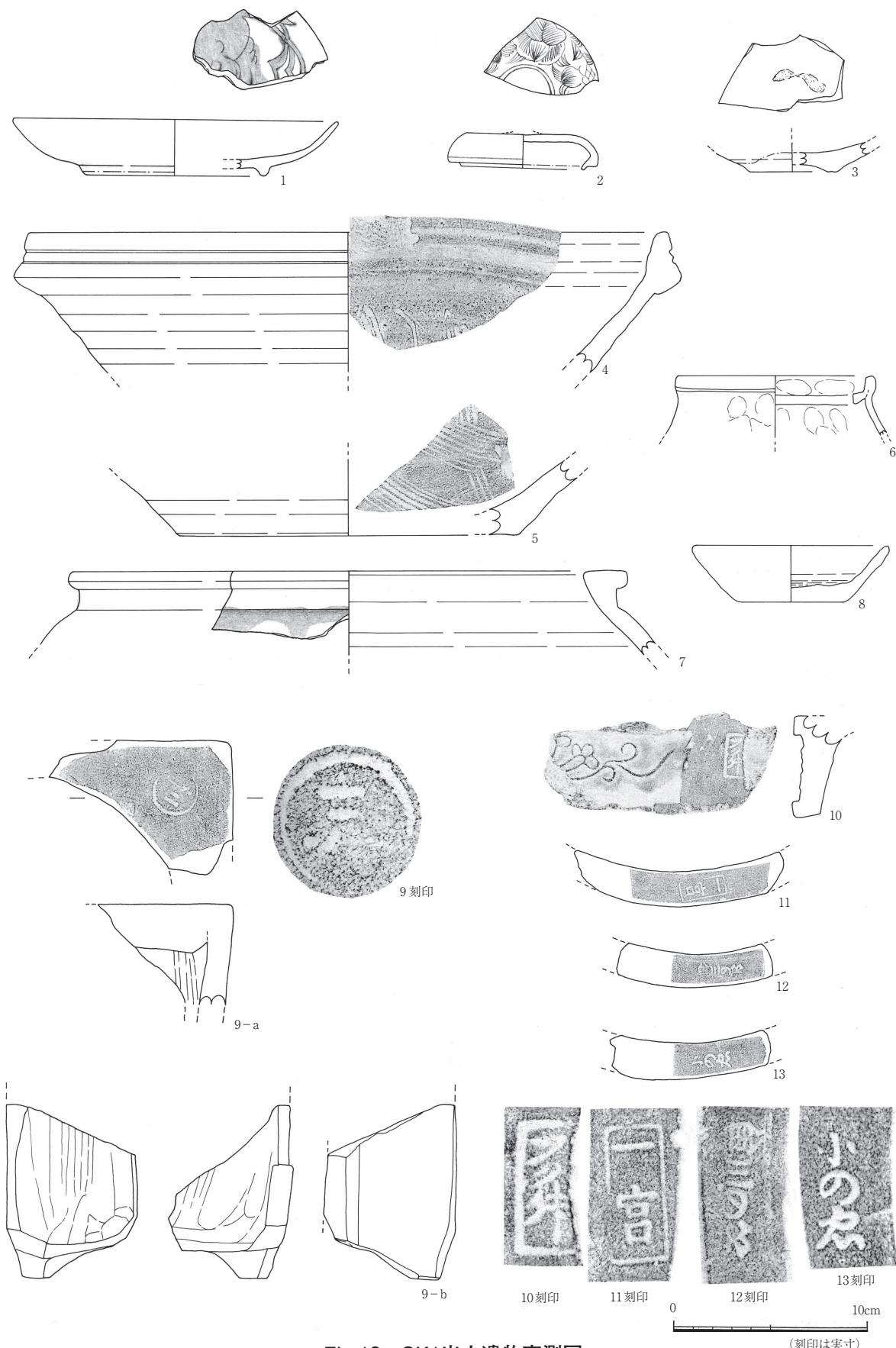


Fig.13 SK1出土遺物実測図

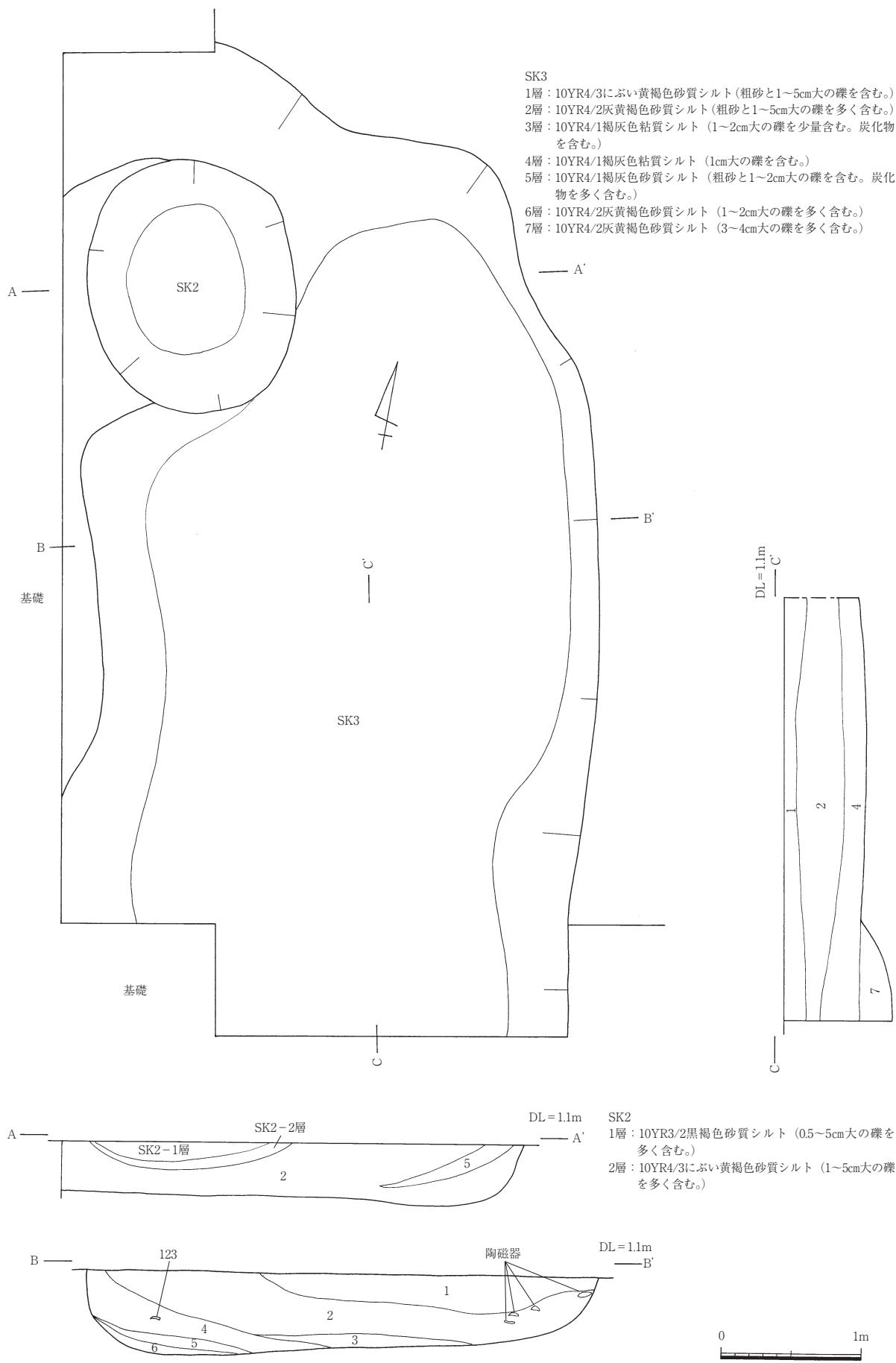
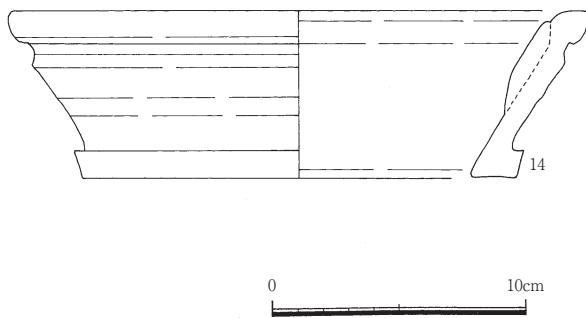


Fig.14 SK2・3平面図・セクション図



**Fig.15 SK2出土遺物実測図**

部に銘印をもつ。10は軒平瓦で瓦当に銘印をもつ。11～13は平瓦で、ともに銘印をもつ。11は角枠内「一宮」の銘印をもち、一宮産（高知市一宮）の製品である。

図示したものの他にも、酸化コバルト型紙刷りによる染付皿、瀬戸・美濃産の緑釉火鉢、在地系の飛鉢を施した行平、低下度釉を施した土瓶などが出土している。

SK1は19世紀中葉（明治初頭）に比定され、建物の取り壊し等に伴う廃棄土坑と考えられる。

#### SK2 (Fig.14・15)

調査区北部に位置する。平面形は橢円形を呈し、規模は長軸1.80m、短軸1.46m、深さ20cmを測る。断面形態は皿状で、埋土は黒褐色砂質シルトと、にぶい黄褐色砂質シルトである。切り合い関係では、18世紀前葉～前半の土坑SK3の上面を切っている。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗6・小碗2・小皿3・蓋物2・紅皿1）、陶器（中碗8・小碗2・小杯1・小皿5・鉢1・擂鉢1・小瓶1・甕1・火鉢又は火入れ1・不明2）、土器（小皿13・焙烙1・焜炉1・五徳1）、鉄製品（釘1）で、18世紀後半から19世紀の遺物が含まれている。

図示したものは、土師質土器の五徳（14）である。この他にも、肥前産の染付端反形碗、白磁紅皿、尾戸窯の灰釉碗、京都系の色絵半球形碗、関西系焙烙、白色系の胎土をもつ焜炉などが出土している。

SK2は19世紀に比定される。

#### SK3 (Fig.14・16～28)

調査区北部に位置する。南部と西部側が搅乱を受けるため全体の規模は不明であるが、南北確認長7.0m、東西確認長3.8m、深さ60cmを測る。平面形は不整形を呈するものとみられ、床面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色砂質シルト、灰黄褐色砂質シルト他で、上層から下層にかけて多量の陶磁器と土器が出土している。切り合い関係では、上面の一部を19世紀の土坑SK2によって切られている。また、東に近接するSK6とは遺物の接合関係があり、同時期に機能した廃棄土坑であったことが推察される。

出土遺物は、個体数にして磁器（中碗55・小碗25・小杯21・小皿69・中皿10・鉢2・猪口8・蓋1・蓋物1・瓶6・壺3・香炉1・人形1・不明3）、青花・五彩（碗1・小杯1・皿5・鉢1）、陶器（中碗64・小皿57・中皿10・大皿2・大鉢1・向付2・擂鉢16・捏鉢3・瓶6・壺1・壺又は甕3・蓋1・香炉2・不明11）、土器（小皿128・白土器小皿8・焙烙1・火鉢1・焼塩壺1）、窯道具（匣鉢15・トチン2・ハマ3）、銅製品（煙管吸口1・煙管雁首1・不明1）、瓦片50（うち桐文棟飾り瓦3）である。

図示したものは、1～13である。1は肥前産の染付中皿、2は蓋物蓋である。3は肥前産の唐津系灰釉陶器小皿で内底に砂目を伴う。4・5は備前焼の擂鉢で、5は内底に斜方向の櫛目を施す。6は手捏ね成形による焼締めの土瓶又は急須である。7は丹波焼の甕である。8は土師質土器の杯。9は瓦質土器の焜炉で、上

図示したものは15～196である。

15～111は磁器。36・54・77～82・94は中国産、その他は肥前産である。

15～36は中碗。15～17は初期伊万里の碗で、17は口縁部外面に渦文を描く。19は外面に雲龍文見込みに荒磯文を施した碗である。22は高台内に「大明成化年製」銘、23は「宣徳年製」銘、25は「大明年製」銘をもつものか。30は高台内に角枠内「福」字を描く。33～35は白磁の丸形中碗で、33は外面に細い線刻による植物と蓮弁文、圈線を施している。36は中国景德鎮窯系の青花碗で、外面に波濤文と芭蕉葉、内面に圈線を描く。

37～45は小碗。41は口縁部輪花形の端反形小碗で、見込みに宝文を描く。高台内に角枠内「福」字を描く。42は草花文の小碗で、高台内に「大明年製」銘をもつ。46～54は小杯。46は高台無釉の草文小杯で、畳付に褐色の粗砂が付着している。47は外面に寿字文と丸彫りによる鎬を施した端反形小杯で、高台内無釉。畳付には灰白色の粗砂が付着している。48・49も丸彫りによる鎬をもつものである。50・51は高台無釉の白磁小杯である。52は外面にコンニヤク印判による文様を施す。53は唐草文を描くものである。54は中国景德鎮窯系の小杯で、口縁部の釉が部分的に剥がれる。

55～91は皿。55～68は初期伊万里の小皿である。69は芭蕉葉に漢詩を描くものとみられる。70は椿、71は内面に花文、外面に花唐草文を描く。72は内面に捻子文、外面に花唐草文を描くものである。73～76は肥前波佐見産の青磁蛇の目釉剥ぎの皿で、高台無釉である。77は中国景德鎮窯系の青花皿。78・79も中国産で、高台内に放射状の鉋痕が残る。80は碁笥底の青花皿で、外面は芭蕉葉、内面は花鳥文を描くものとみられる。中国景德鎮系で15世紀後半～16世紀前半の製品である。81・82は中国漳州窯系の五彩皿である。84・85は染付中皿である。84は内面に桜を描き、上手の製品である。86・87は青磁中皿。88～91は青磁大皿である。86は折縁形の中皿で周縁に鎬文を施す。88は内面に印刻による算木文を配し、高台内は蛇の目釉剥ぎの後鉄錆を刷毛塗りする。89は片切り彫りによる陰刻文を施すもので、蛇の目凹形高台に鉄錆を塗布する。90はヘラ彫りで竹文を描くもので、高台内は蛇の目釉剥ぎである。91もヘラ彫りによる陰刻文を施すものである。

92は色絵染付の鉢。外面は呉須による蓮弁文と丸文に赤と薄緑の上絵付で雲龍文を描く。内面には赤と薄緑の上絵付で桃と草花を描いている。93は腰張形の猪口で、外面に草花文と蝶を描き、高台内に「□□年□」の銘をもつ。94は半筒形の碗か。内外面に鉄釉を施す。95は中国景德鎮窯系の青花である。96は色絵染付の蓋物蓋で、圈線を呉須、草花文を黄・緑・黒の上絵付で描いている。97は色絵染付の蓋物の身。圈線を呉須、草花文を赤・その他の上絵付で描いている。98は香炉で、外面下位に鉄釉、上半に透明釉を施す。99は陽刻型押し成形による青磁の瓶。獣面の双耳を貼付し、体部外面の双方には陽刻の寿と福字を配し、周囲に花唐草文を巡らす。青磁釉はオリーブ灰色に発色している。中国龍泉窯14世紀後半～15世紀中葉の製品である。100・101は壺。102は青磁染付の壺か。104は初期伊万里の瓶で、高台内に陶器片が溶着している。107は器種不明。外面に釉裏紅で縞状の文様を施し、釉は赤紫色に発色する。108は器種不明の体部片で外面に薄瑠璃釉を施している。109は型押し成形貼り合わせによる人形又は水滴で、婦人像。黒の上絵付で髪と顔を描いている。111は白磁又は染付の瓶か。

112～175は陶器。112～131は碗。112～127が肥前産、131が瀬戸・美濃産、128～130が産不

明である。112・113・116～118は高台無釉の鉄釉丸碗、114・115・119は高台無釉の灰釉碗である。120は撥状に開く高台をもつ。121は高台施釉の灰釉丸碗で、部分的に緑釉を流し掛けしている。122・126・127は京焼風陶器の碗で、楼閣山水文を描く。126は高台内に小判枠内「宝」銘印を認められる。123～125は高台施釉の灰釉丸碗である。131は瀬戸・美濃産の天目形碗である。

132～149は皿。132～140・144～149は肥前産、141は肥前系、142・143は産不明である。132～134・137は肥前内野山窯の灰釉皿で、内底に砂目を伴う。135は肥前内野山窯の緑釉小皿で、外面に灰釉、内面に緑釉を施す。見込みの蛇の目釉剥ぎ部分には砂目痕が残る。136は見込み蛇の目釉剥ぎの灰釉小皿で内面に鉄錆で圈線が描かれる。138～140は唐津系灰釉陶器の小皿で、139は内底に砂目痕、140は胎土目痕が残る。141は、灰釉を施し内底の釉を円形に拭き取った後に砂目を施す。底部は平底で、外底に回転糸切り後痕が残る。142は灰釉の菊花形小皿。143は灰釉小皿で錆絵を描く。144は絵唐津の大皿で内底と高台に団子状の胎土目痕が残る。145は折縁形の大皿で、内面に白化粧を施した後、緑釉と鉄錆で文様を描くものである。146は刷毛目二彩手の中皿で、内底に白土目を伴う。148・149は折縁形の三島手皿。148は内面に白象嵌の蓮弁文と花唐草文と白化粧土刷毛目を施すものである。149は内面に白象嵌による印花文と帶線を施した後、白化粧土刷毛目を施す。

151は肥前産の刷毛目二彩手の大鉢である。152は絵唐津の小鉢で、口縁を方形に変形させている。153は織部焼の向付で、錆絵を描き灰釉に緑釉を掛け分ける。154は三足を貼付するもので、錆絵を描き灰釉を施す。155は備前焼の向付か。

156は鉄釉の捏鉢。157～161は擂鉢である。157は丹波焼の擂鉢。158は瀬戸・美濃産の擂鉢で暗褐色の鉄釉を施している。159～161は備前焼擂鉢である。

162・163は瓶。164は瓶類の底部か。165は絵唐津で、瓶類又は火入れ。169は肥前産の甕で、肩部に2条の縄状突帯を貼付する。内面に同心円状の当て具痕が認められる。170は器種不明。オリーブ黄色を帯びる透明の釉を施しており、瀬戸・美濃産か。171・172は灯明受皿。171は内面片側のみに灰黄褐色の釉を施し、外面は無釉である。内底には砂目痕が残る。172は焼締めで、口縁部内面に円形文を貼付する。173は灰釉の火入れ又は香炉である。174は尾戸窯の製品で器種不明。外面下位に丸彫りによる多条の沈線を巡らせる。175も尾戸焼で把手の部分か。

176～178は窯道具で、近隣に所在する尾戸窯に関連するものか。

179～188は土師質土器。179～182は尾戸窯の白土器小皿で、胎土は灰白色を呈する。179・180は無文のものである。183～186は土師質土器小皿で、185・186は口縁部に灯芯油痕や煤の付着を認める。187は焼塩壺。188は関西産の焙烙で、双耳をもつ。189は瓦質土器で、箱形の火鉢である。

190～193は瓦。190は巴文の軒丸瓦。191～193は桐文の棟飾り瓦である。

194～196は銅製品。194は煙管の雁首。195は煙管の吸口。196は用途不明の銅製品である。

SK3では、波佐見青磁蛇の目釉剥ぎ小皿が5個体、陶器鉄絵蛇の目釉剥ぎ小皿が5個体、初期伊万里の草文小皿5個体など、組で出土するものが多く含まれる。また、伝世品とみられる中国青磁、青花や、志野焼、織部焼など茶の湯に関連する遺物、肥前産の上手の製品が多く含まれる点が特徴的である。

SK3の廃絶年代は17世紀末に比定される。

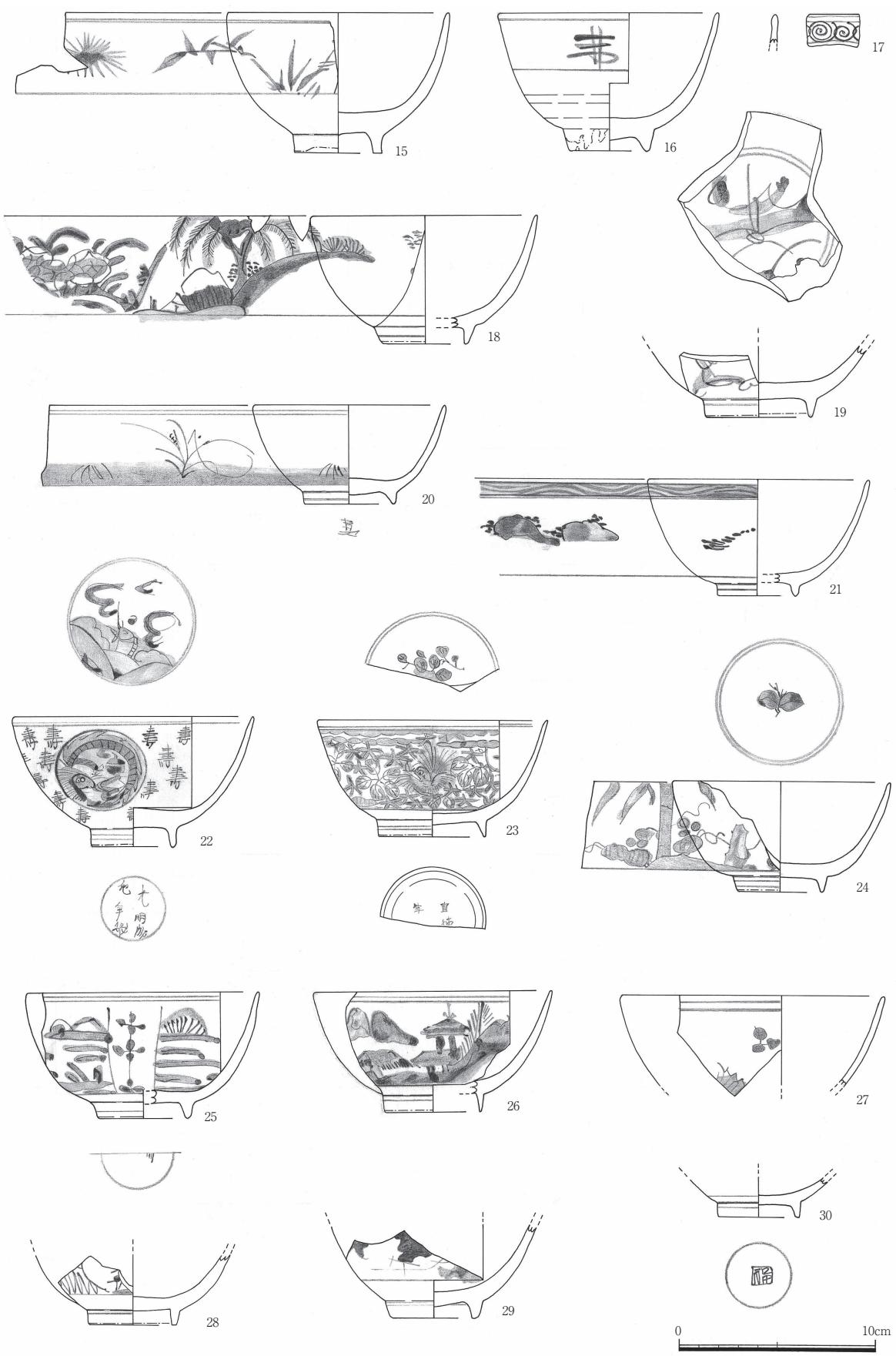


Fig.16 SK3出土遺物実測図 (1)

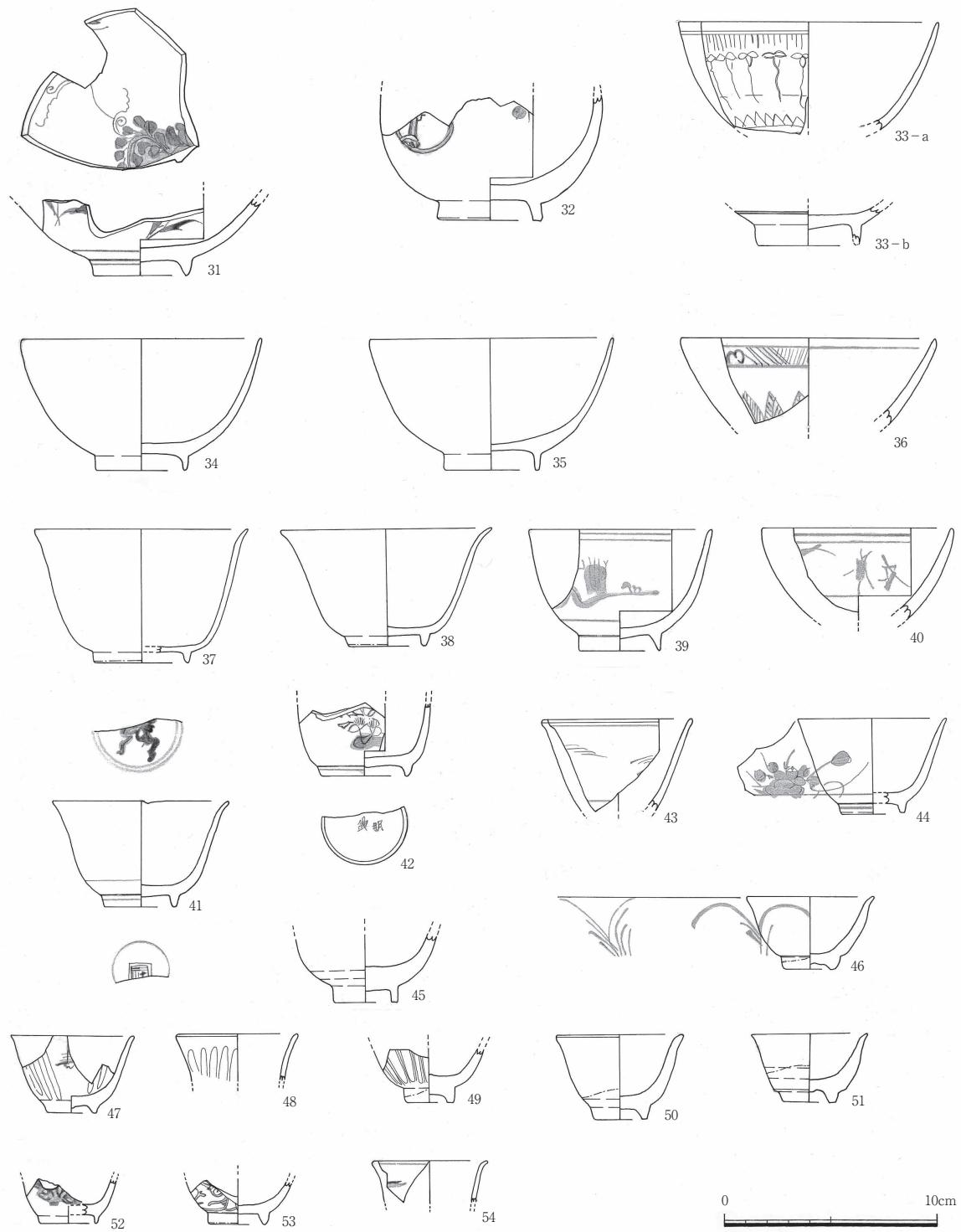


Fig.17 SK3出土遺物実測図 (2)

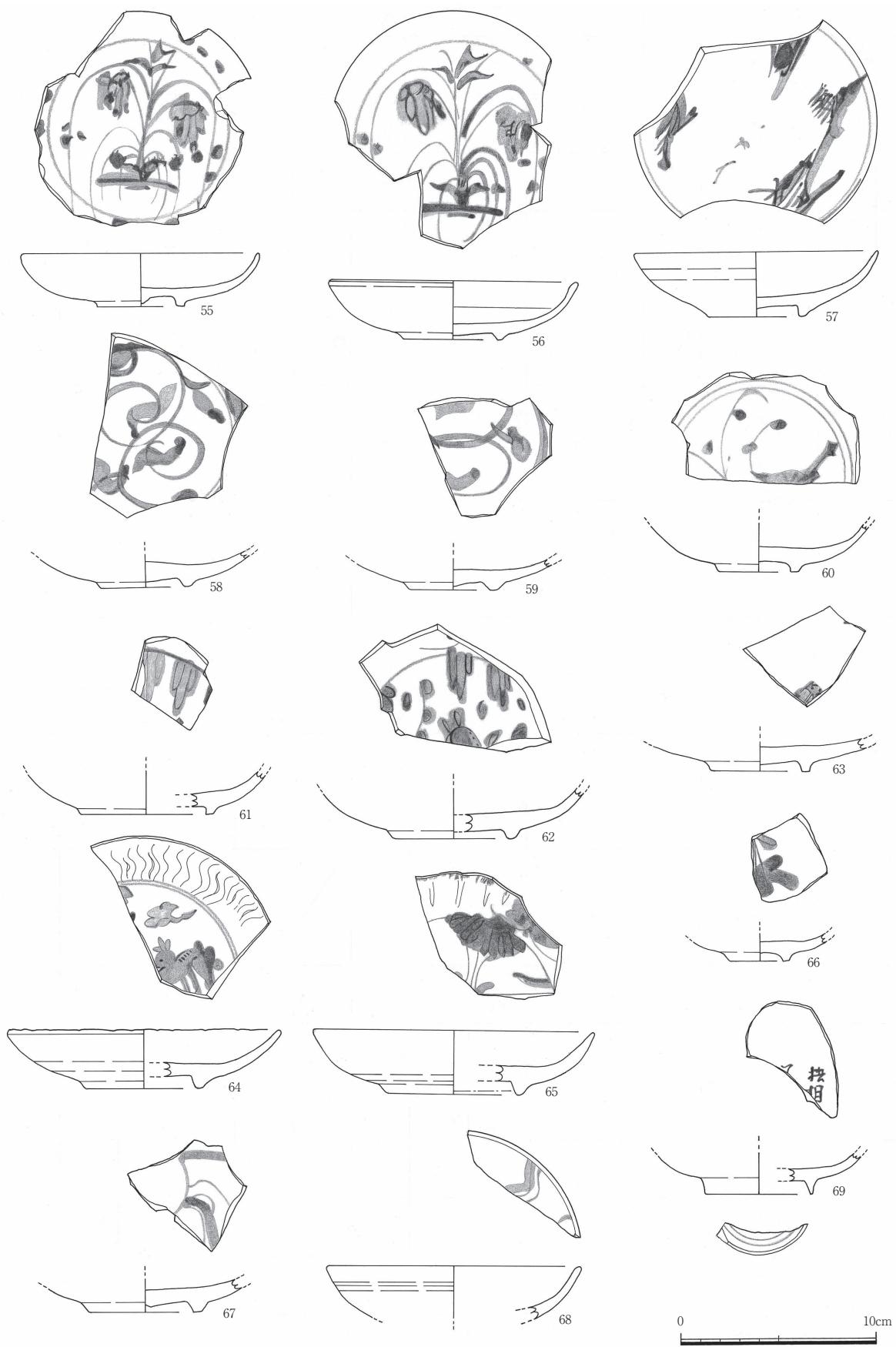


Fig.18 SK3出土遺物実測図 (3)

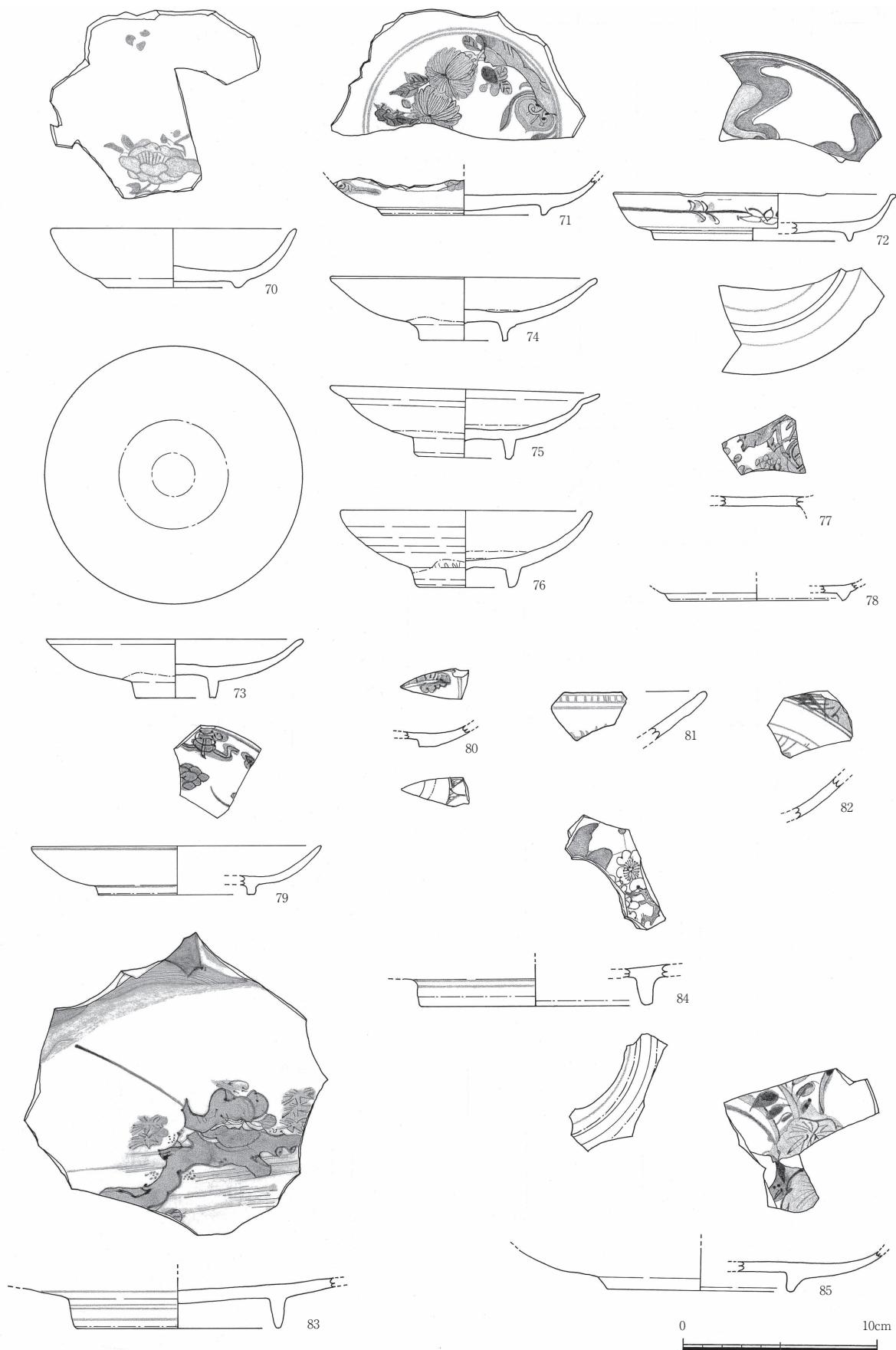


Fig.19 SK3出土遺物実測図 (4)

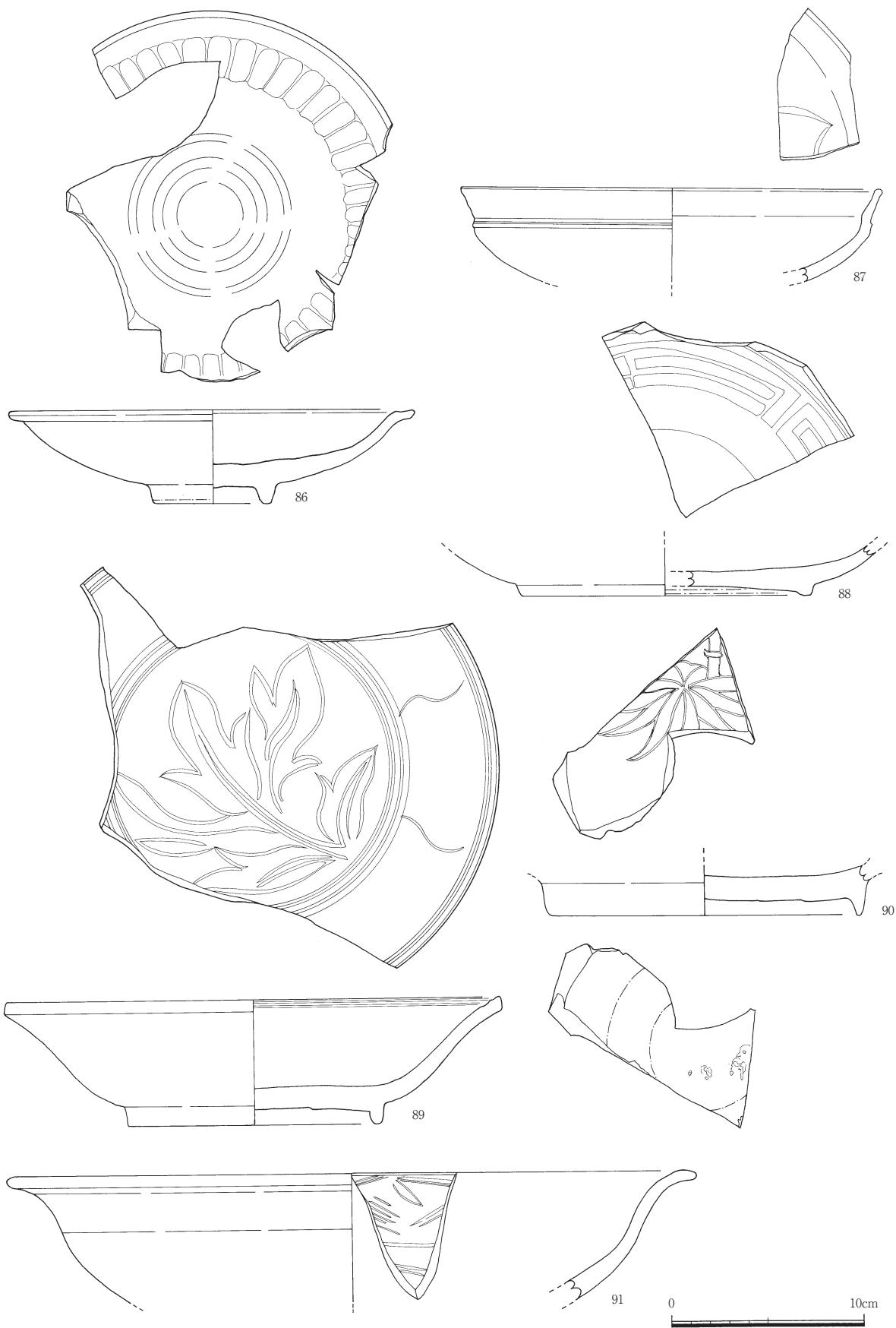


Fig.20 SK3出土遺物実測図 (5)

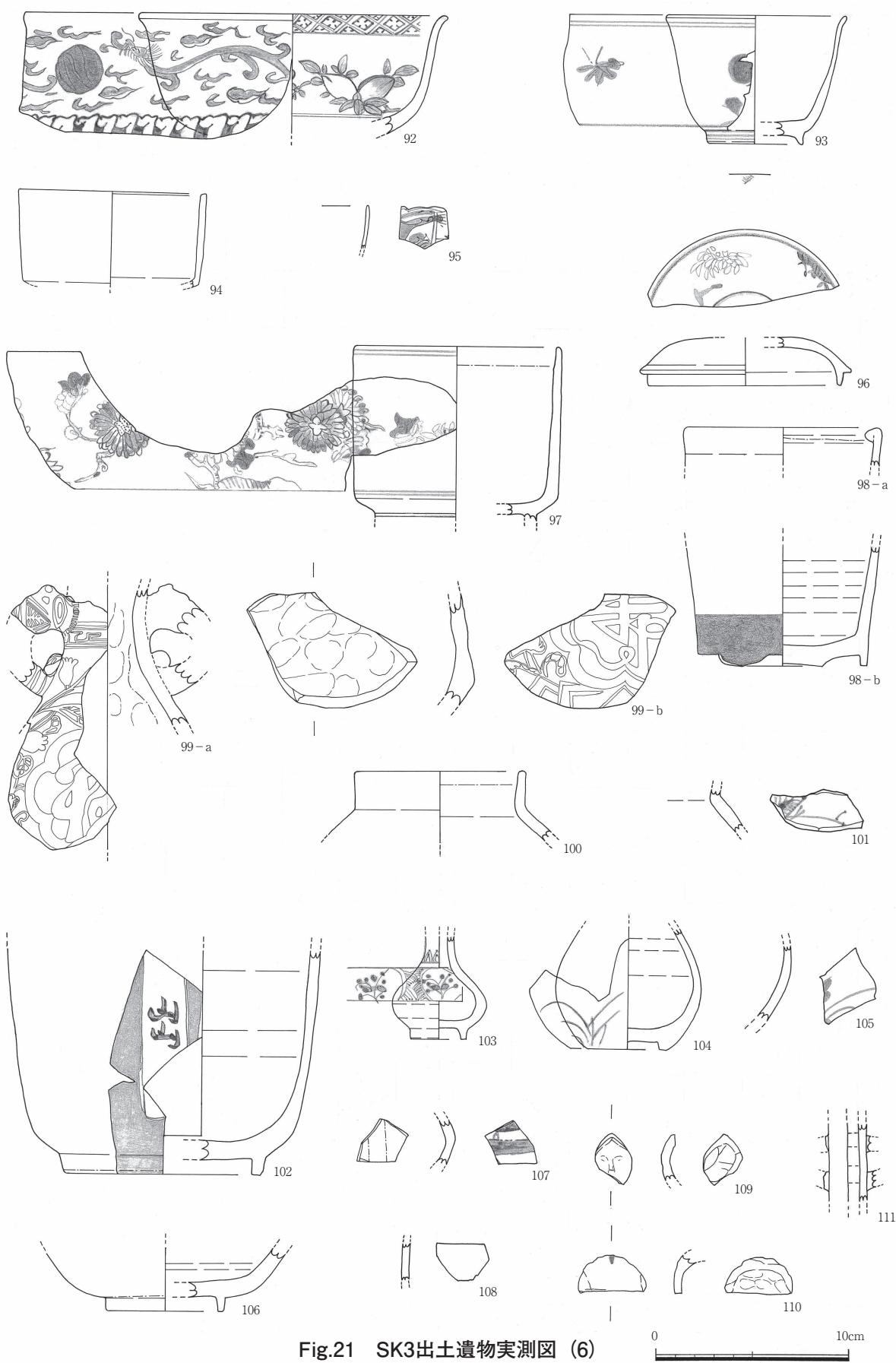


Fig.21 SK3出土遺物実測図 (6)

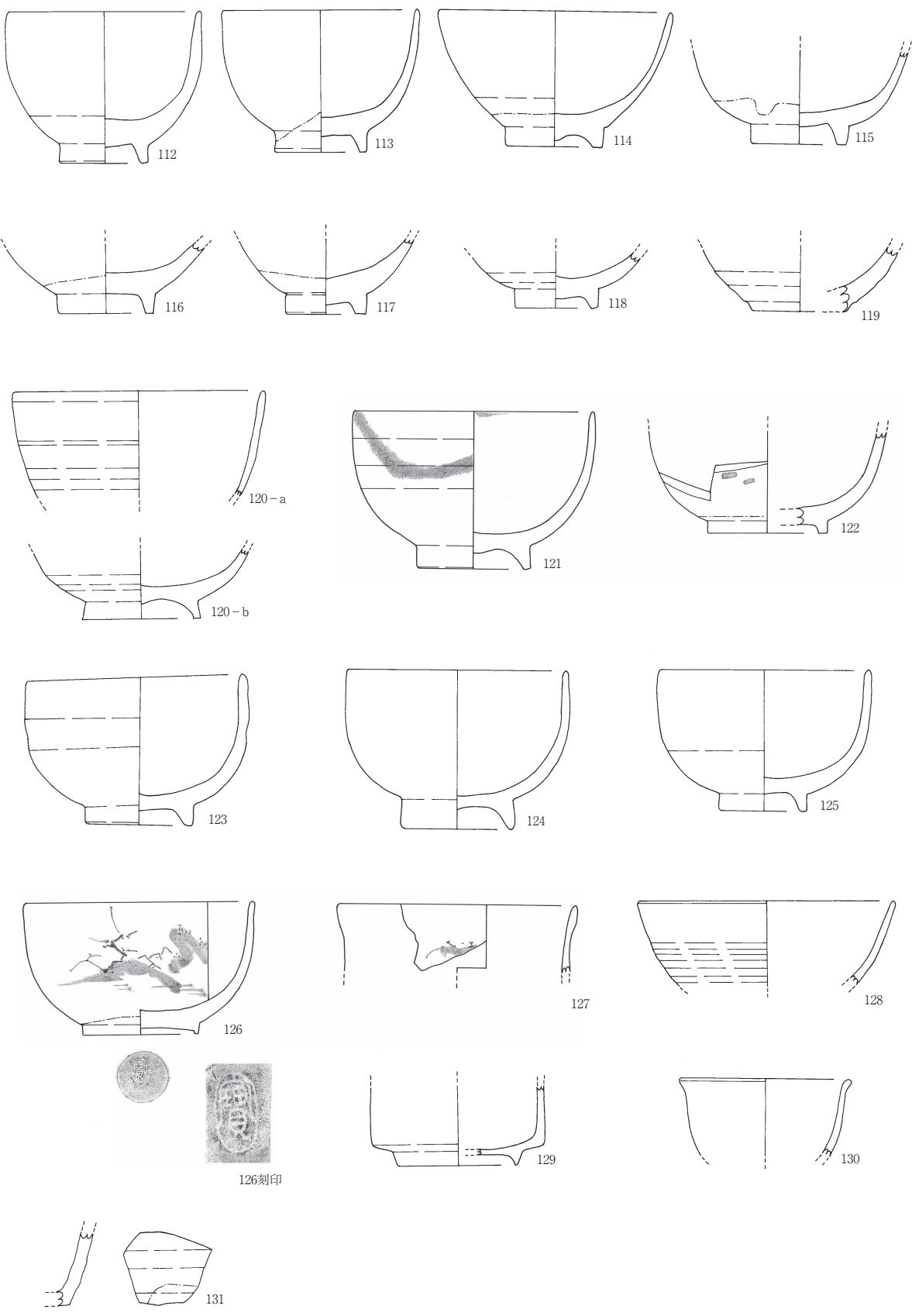


Fig.22 SK3出土遺物実測図 (7)

0 10cm  
(126刻印は実寸)

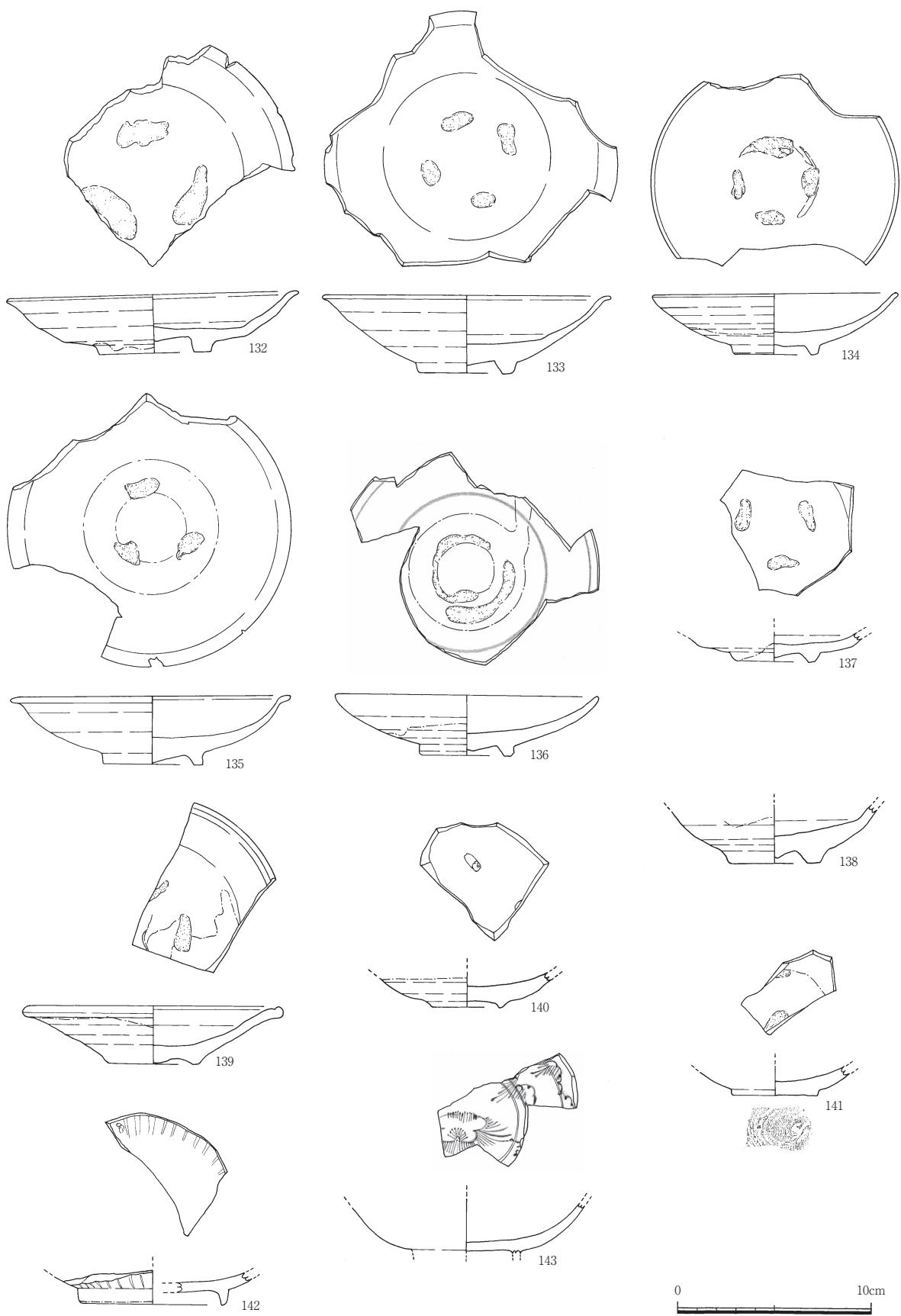


Fig.23 SK3出土遺物実測図 (8)

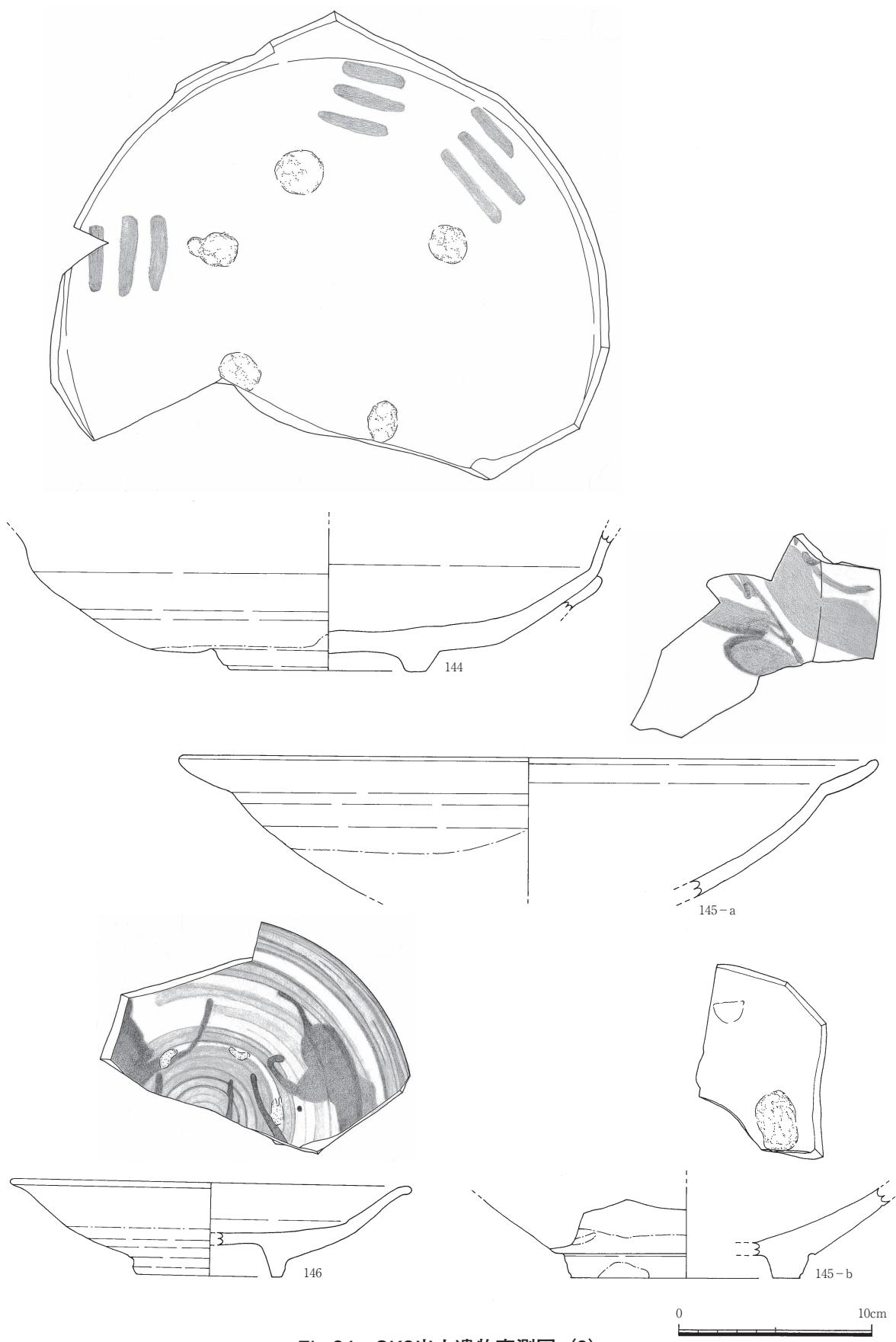


Fig.24 SK3出土遺物実測図 (9)

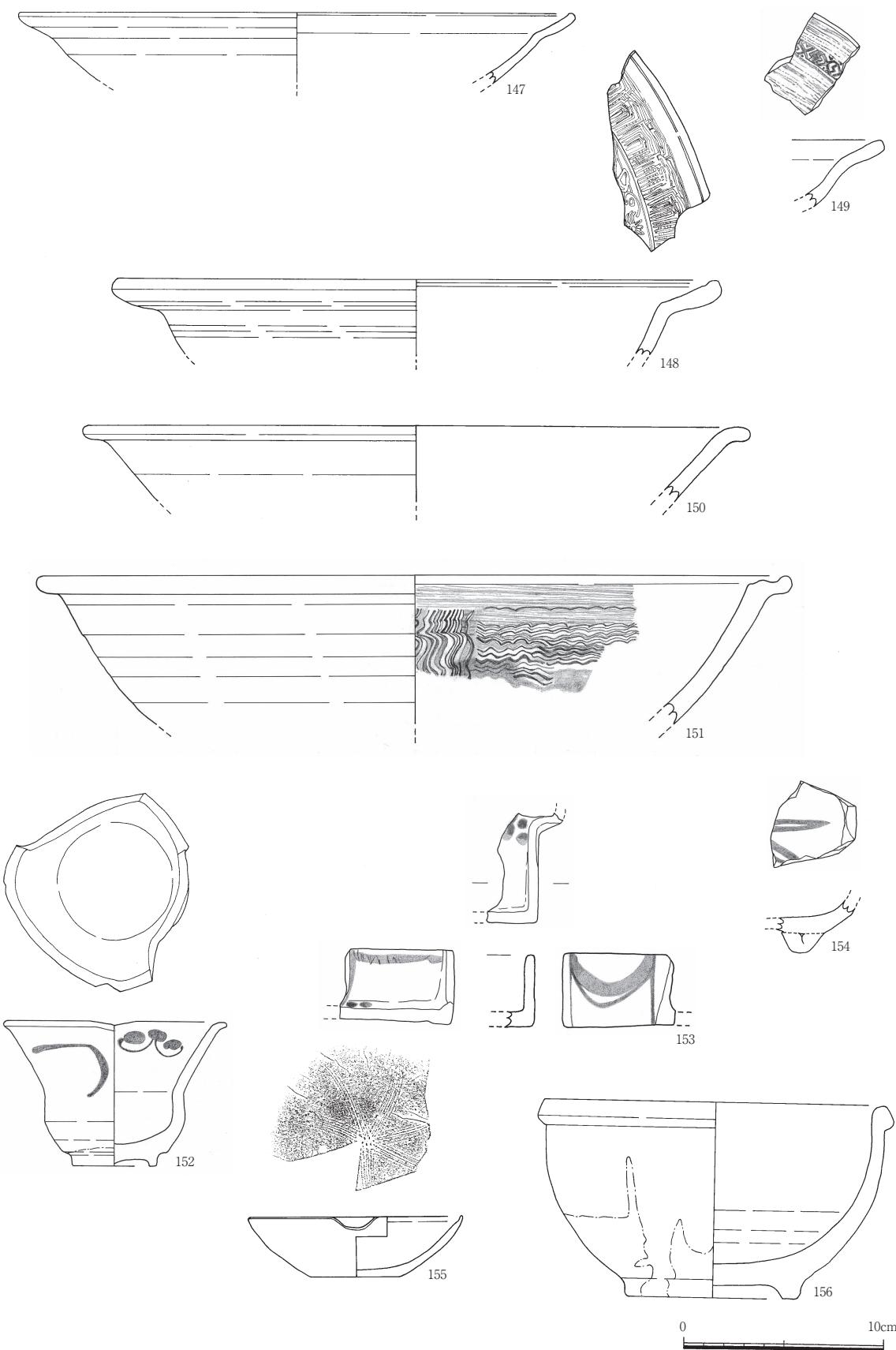


Fig.25 SK3出土遺物実測図 (10)

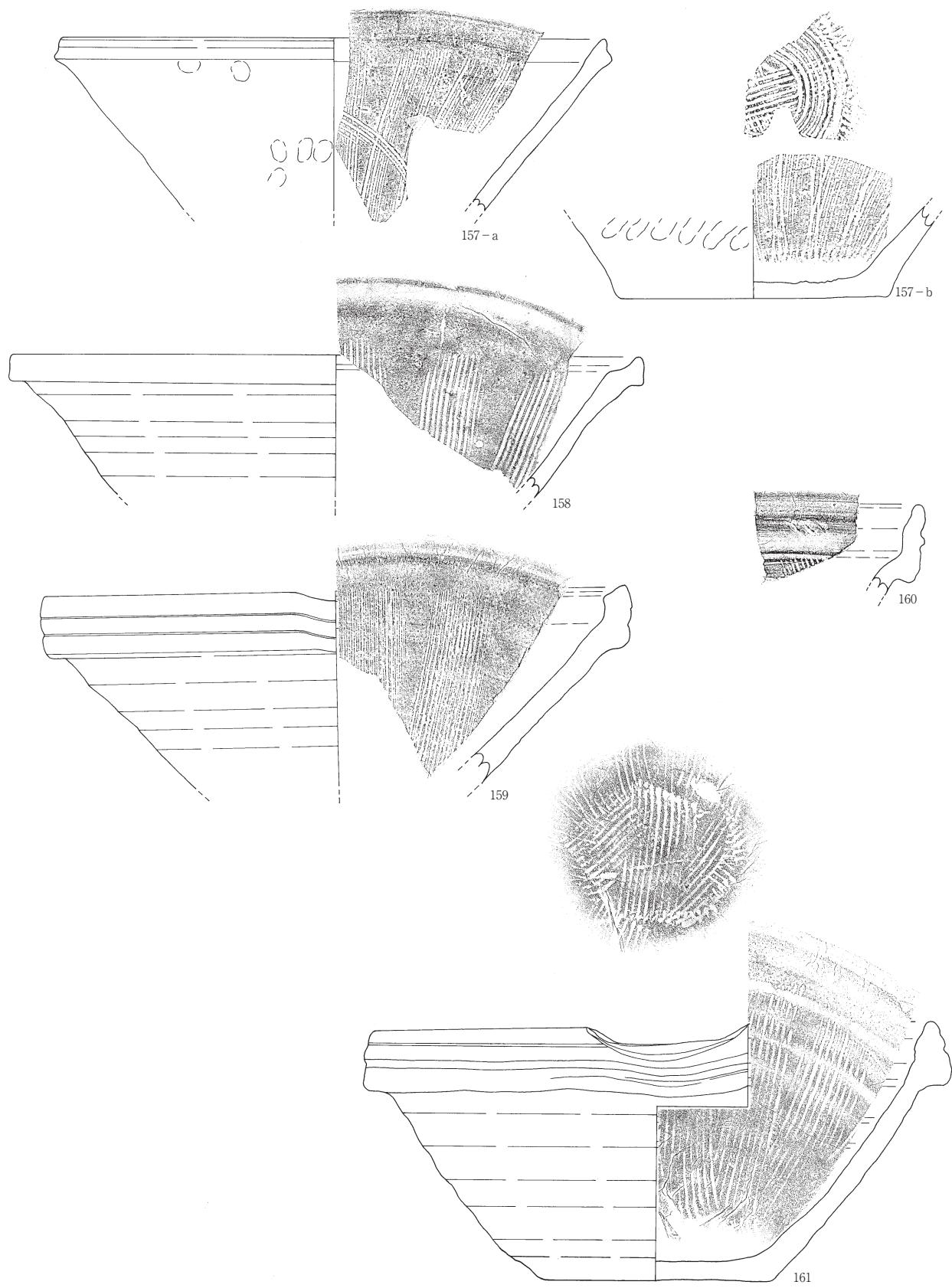


Fig.26 SK3出土遺物実測図 (11)

0 10cm

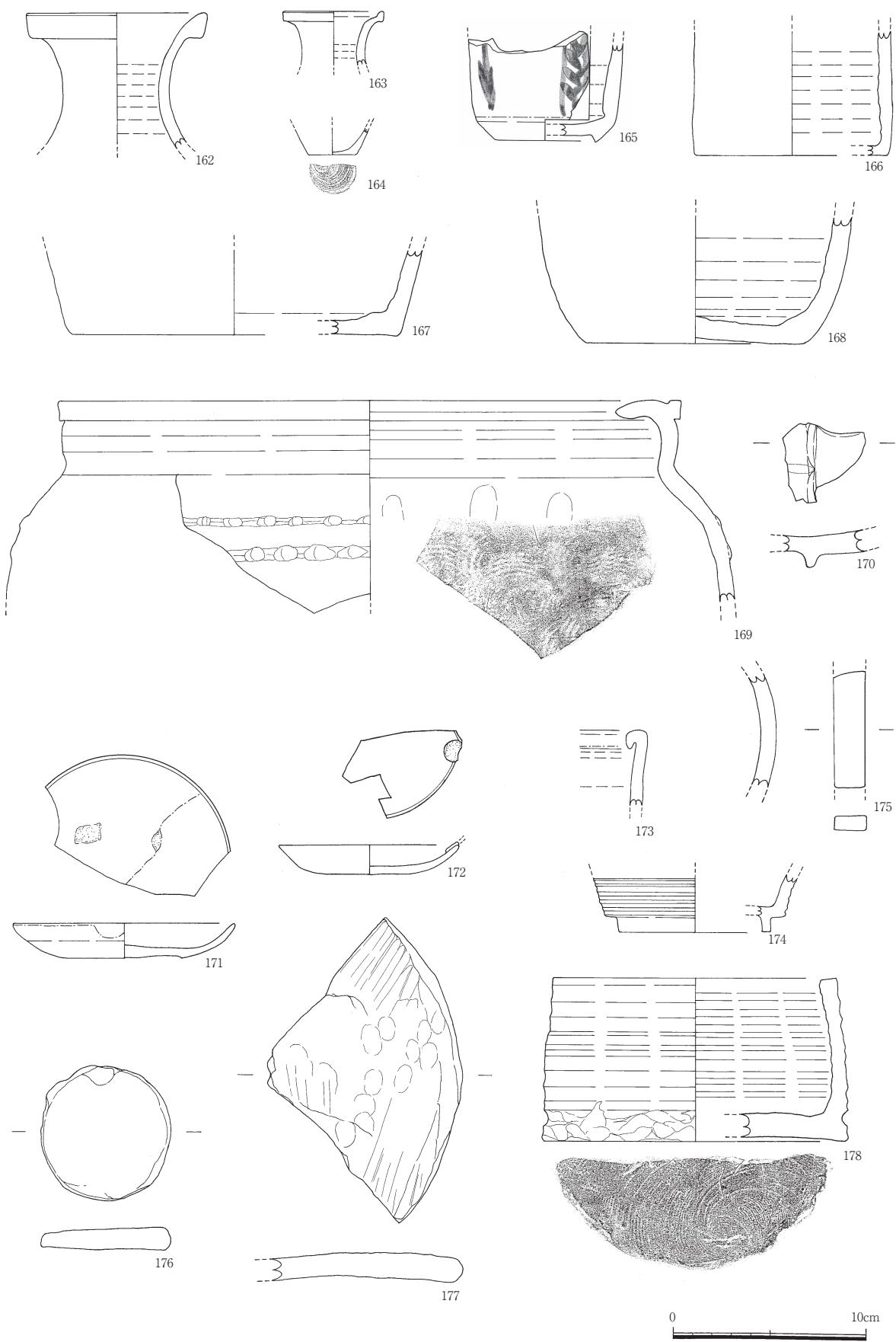


Fig.27 SK3出土遺物実測図 (12)

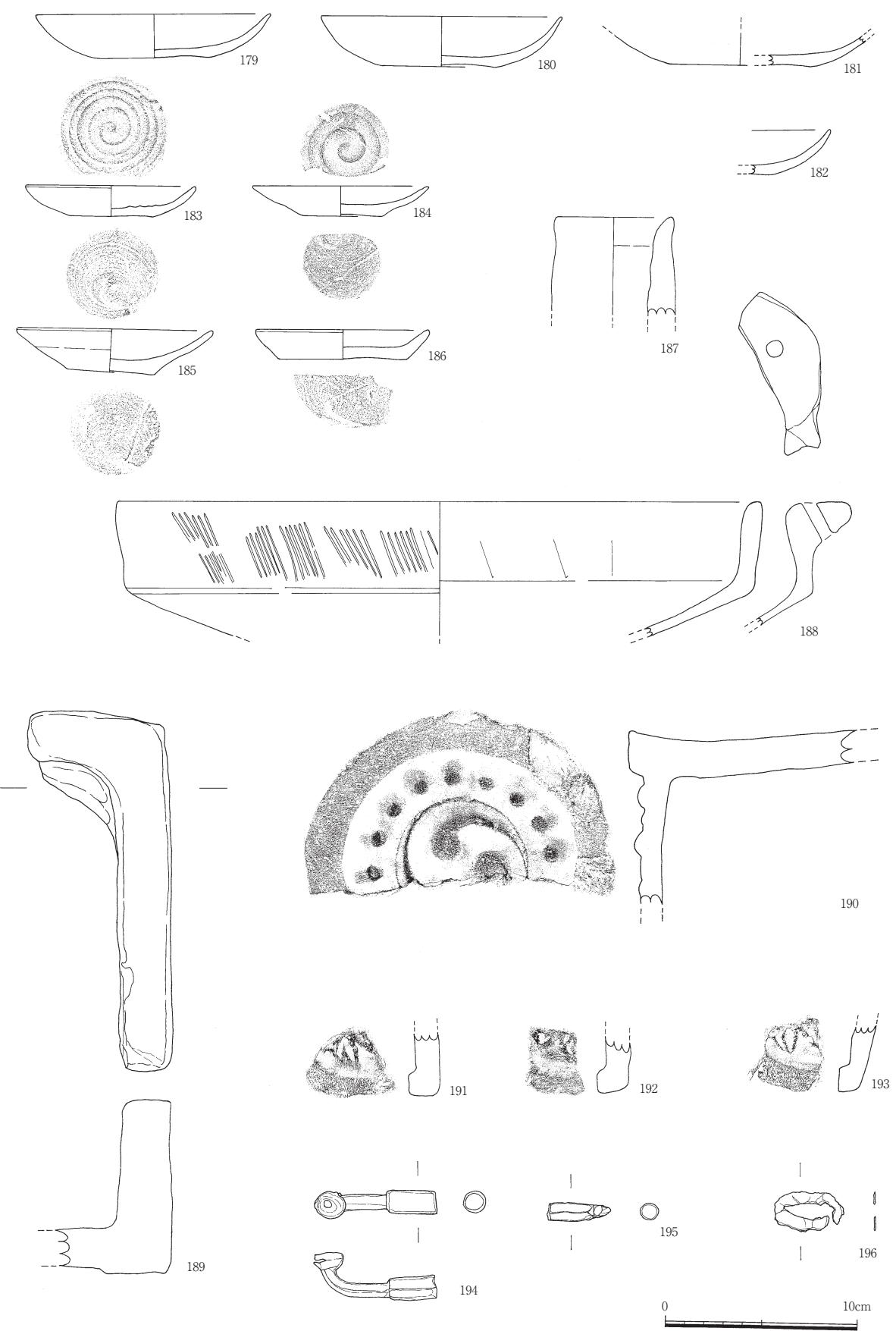


Fig.28 SK3出土遺物実測図 (13)